

冬の新製品ベスト&ワースト

ケータイ最新結論

個人生活を刺激する流行情報誌

日経トレンド

TRENDY

年末
バイヤーズガイド
3大特集!

JANUARY 2008

毎月1回1日発行
通巻274号 2008年1月1日発行
1988年2月26日第三郵便物認可

次世代商品、「買い」か? 「待ち」か?

新製品完全テスト

デジタル一眼レフ、コンパクトデジカメ、デジカメ便利グッズ
テレビ、レコーダー、6万円カーナビ、ドライブレコーダー
iPod対応コンポ、モバイルノートPC

洗濯乾燥機、掃除機&掃除ロボ、炊飯器、ホームベーカリー、電子ピアノ
有機ELテレビ、高級真空管アンプ、高機能マッサージチェア

大人もハマる“部屋ラジ”はどれだ

「飛ぶ・動く」おもちゃ
総チェック

端末の値段も、サービスも大きく変化

ケータイは今、替える!

特別定価600円
日経ホーム出版社

日経トレンド No.274 2008.1月号

2008年(平成20年)1月1日(毎月1日発行)通巻274号
昭和63年2月26日 第三郵便物認可

発行人 兼 編集長 北村 泰 発行 日経ホーム出版社

〒107-8406 東京都港区赤坂8-1-22
電話 編集部 03-5411-3064 マーケティング部 03-5411-3050

発達・加速はゆるやかに。エコドライブに心がけよう。

Drive Your Dreams. 人、社会、地球の新しい未来へ。

TOYOTA

07'08グッドデザイン賞受賞



X-Seater
全席を招待席に。

セダンより自由に。
ワゴンより贅沢に。
ミニバンより優雅に。



新・大人関係、はじまる。MARK X ZiO

Photo:マークX ジオ 350G(3.5ℓ・2WD)。ボディカラーはシルバーメタリック<1G7>。内装色はブラム。本革シート表皮(173,250円)、HDDナビゲーションシステム(426,300円)はメーカーオプション。※画面はハメ込み合成です。全長×全幅×全高(mm):4,695×1,785×1,550 エンジン:2GR-FE(3.5ℓ・V型6気筒 DOHC) 最高出力<ネット>:206kW(280PS)/6,200r.p.m. 最大トルク<ネット>:344N・m(35.1kg・m)/4,700r.p.m. ※平成17年基準排出ガス 75%低減レベル[低排出ガス車認定制度(国土交通省認定制度)]

[350G/3.5ℓ(2WD)] 333.0万円 [240/2.4ℓ(2WD)] 256.0万円

※価格はすべて、メーカー希望小売価格(消費税込)で参考価格です(北海道・沖縄地区を除く)。価格は各販売店が独自に定めておりますので、詳しくは販売店にお尋ねください。※リサイクル料金が別途必要になります。365日お車選び、装備の使い方、メンテナンス、最新の情報、その他ライフに関することなどお気軽にご相談ください。トヨタ自動車(株)お客様相談センター ☎0800-700-7700 9時~18時(カタログのご請求は24時間受付) お近くのトヨタ販売店へ。東京地区は東京トヨタでも取り扱っております。◎MARK X ZIO モバイルカタログへアクセス

もっとクルマの話、
しませんか。
Answer, for you.
TOYOPET

セッションからはじめよう
キャンペーン
ご来店の上、アンケートにお答えいただくと、抽選で全国合計1,000名様に当たる。
[試乗キャンペーン、同時開催!]「選べる大人の楽しみ」を抽選で全国合計150組600名様にプレゼント!
詳しくはお近くのトヨタ販売店、またはトヨタベストストアへ。[トヨタベストストア] 検索

大人たちの時間をもっと
素敵に彩るプレゼント!

MARK X ZiO
G-BOOK mX Pro 3年間無料キャンペーン
キャンペーン期間:2007年9月26日(水)~2007年12月31日(月)
※終了時期は販売店によって異なります。詳しくは販売店までお問い合わせください。

弘兼憲史 原作・脚本 -WEBオリジナルドラマ- 星空研究会 X-Seater <http://toyota.jp/markxzio/>

雑誌 17101-01

特別定価600円 本体571円

大日本印刷株式会社 Printed in Japan



4910171010189
00571

高画質で超薄型へ

KURO(パイオニア)は、コントラストの表現力に優れたプラズマパネルをさらに進化させた製品。暗部の表現が従来のプラズマテレビよりも格段に良く、画面の黒色部分はテレビのフレームと区別がつかないほど。一方、07年のCEATECでは、各社が超薄型タイプのテレビを展示。高画質で超薄型の製品が今後増えていく。



①最薄部37mmの液晶テレビ(日本ビクター) ②42型のプラズマテレビ「KURO PDP-428HX」(パイオニア)

●Woo UT32-HV700(日立製作所)

UT32-HV700は、厚さ3.5cmの32型液晶テレビ。本体は液晶部と分かれておりHDMIで接続する。解像度は1366×768ドット。ハイビジョン映像を無線で飛ばせるワイヤレスユニットもオプションで用意。「レイアウトフリー」(同社)な視聴環境をつくれるのが魅力だ。08年2月には37型、4月には42型のモデルを発売予定。



●実勢価格/22万8000円●画面/32型●サイズ・重さ(液晶部)/幅81.4×高さ58.7×奥行き24.9cm・13.5kg●地上デジタルチューナー/1

④液晶部の背面はフラットなつくり⑤本体側のiVDR-Sにテレビ番組を録画可能

08年はこうなる

フルHD画質のほか、録画機能や動画配信に対応した製品が市場のスタンダードになる。今後はパネルやフレーム部の薄型化が新たな価値を生み出し、技術競争の焦点となる

各メーカーから「フルHD対応テレビ」や「次世代光ディスクレコーダー」の新製品が出そろった。AV機器は「高画質」がスタンダードになったこの冬、商戦が買い時なのだろうか。射撃圈内に入った薄型テレビやレコーダーだが、長い間使ったものだけに、製品選びは慎重に行いたい。そのためには、これらの製品を取り巻く現状と今後の流れについて知っておく必要がある。

薄型テレビは「37・42型が人気」(ビッパカメラ有楽町店)で、新製品の多くはフルHDパネルを採用している。解像度もさることながら、その画質は一定レベルをクリアしている製品がほとんど。「薄型テレビの画質は『よし』ではなく、『好み』で選ぶ時代になった」(AV評論家・麻倉伸士氏)。どれも十分合格点、あとは自分の好み次第というところまで来た。

となると、今後は画質以外の機能が製品選択の重要なポイントとなる。

注目したいのがHDD録画機能。東芝のZシリーズは、USB接続したHDDへの録画が可能。同シリーズのユーザーで「HDD録画機能を使っている割合は約7割」(東芝)にもなるといふ。HDD録画機能はタイムシフトユーザーの利用が多く、今後の薄型テレビの標準機能になるとみられている。

動画配信サービスへの対応も標準機能の一つになりつつある。松下電器産業、ソニー、シャープ、東芝、日立製作所などが出資する「アクトビラ」は、07年9月から動画の配信サービスを開始。今後は動画のラインアップを充実させ「レンタルビデオの置き換えを狙う」(アクトビラ)。主要テレビメーカーが出資しているという点もあり、将来的には多くのユーザーに受け入れられる可能性を秘めている。

一方、レコーダーの新製品で注目したいのが「ダビング10規格」への対応だ。現在の「コピーワンス規格」は、HDDに録画した番組を光ディスクなどに移動することしかできなかった。しかし、ダビング10であれば、最大9回のコピーと1回の移動が可能。ダビング10に対応した放送が開始されれば、テレビ録画の利便性は飛躍的に高まる。

そのほか、ハイビジョン画質を保ったままデータ量を従来よりも少なくできる「AVC記録モード」を搭載した製品も増えてきた。同じHDD容量でもより長時間の録画が可能になった。ブルーレイ(BD)やHDDVDはもちろんだが、DVDメディアにAVC記録が可能なモデルも登場。今までは無理だった「DVDへのハイビジョン記録」が可能になった。

今までにないコピー規格や録画機能が登場しはじめた過渡期だからこそ、商品選びは難しい。果たして、どの一台なら今買っても大丈夫なのだろうか。新たな規格や機能の動向を踏まえつつ、最新モデルの実力を検証した。

HDD録画対応

かつての「テレビデオ」のように、録画機能を持った薄型テレビが注目されている。HDDを内蔵、または接続できるこれらの製品は、「録画番組を見たら消す」というタイムシフトユーザーに支持されている。将来的に「HDD録画はテレビの標準機能になっていく」(AV評論家・潮崎男氏)とみられ、テレビがレコーダー機能を取り込みつつある。



①ソニーは薄型テレビの背面に取り付け可能なHDDレコーダーを発売②日立製作所の薄型テレビには、カートリッジ式HDD「iVDR-S」に録画できる製品もある

ネット動画

サービスが開始され、対応する薄型テレビが増えてきた「アクトビラ」。アクトビラには文字情報の「ベシック」、映画やアニメなどの動画配信「ビデオ」が用意されている。今後、薄型テレビを比較するうえで、一つの検討要素となる。



AVC記録モード

ハイビジョンの解像度を維持しながら従来よりも少ないデータ量で録画できる「H.264/AVC方式」を採用した製品も登場。高画質で長時間録画できることが利点だが、使えるメディアの種類や詳細な方式は各社で異なる。例えば、東芝や松下の新製品はDVDメディアに最長1.5〜2時間のハイビジョン記録が可能だが、両者に互換性はない。



長時間記録可能な「HD Rec」を採用した「VARDIA RD-A301」(07年12月中旬発売予定)

■長時間録画モードを記録できるメディアは、メーカーにより異なる

	AVC記録できるメディア*
東芝	HDD、HD DVD-R、DVD-R/RW、DVD-RAM
ソニー	HDD、BD-R/RE
松下電器産業	HDD、BD-R/RE、DVD-R、DVD-RAM

録画機能の取り込み

機能の連携

AVリンク機能

松下の「VIERA Link」のように、HDMI接続した機器を、テレビのリモコンでコントロールできる機能が定番になりつつある。連携できる機器はレコーダーだけでなく、ネットワークHDDやカメラ付きドローンなど範囲が広がっている。「テレビとレコーダーをセットで販売できる」というメーカーや販売店側の思惑もあるが、利便性が向上するためユーザーが受けるメリットも大きい。

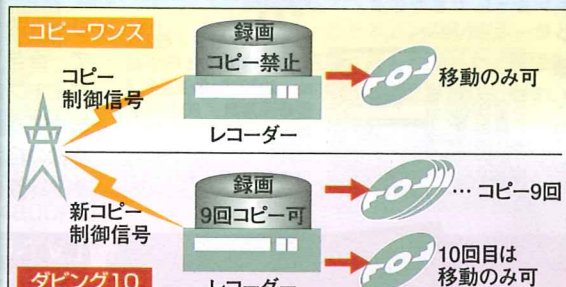
ダビング10

「ダビング10対応予定」をうたう製品が増えてきた。ダビング10とは、従来の「コピーワンス」を拡張した著作権保護規格。ダビング10の信号を含んだ番組をレコーダーのHDDに録画した場合、9回のコピーと1回の移動(ムーブ)が可能になる。今後発売されるレコーダーのほとんどはダビング10に対応する。



対応を予定している製品もあるが、規格はまだ策定されていない

■10個の「複製」を作れるダビング10



ダビング10はコピーワンスよりも利便性が上がるが、コピー(移動)したディスクからさらに孫コピーすることはできない

結論

フルHD時代の薄型テレビは、機能や将来性、使い勝手で選べば東芝に軍配。レコーダーはダビング10へ対応予定で、DVDにHD画質で記録できる松下が買い

将来性がないと、安心はできない

薄型テレビとレコーダー

液晶 BRAVIA KDL-40W5000 (ソニー)

実勢価格29万8000円

映画鑑賞に向けた画質。動画配信にも対応

画質は東芝と同レベルで、肌の色の表現力が高い。映画モードの画づくりも秀逸。音は標準的。アクトビラは「ビデオ」に対応。別売りのネットワーク

TVボックスを使えば、「ビデオ・フル」のほか、Gyaoなどの動画配信サービスも使える。リビングで映画を見ることが多いのなら「買い」に値する。

◆独自機能・将来性

今回検証したなかでアクトビラの「ビデオ」に唯一対応している。BRAVIA LinkでBDレコーダー以外にもオプションのHDDユニットなどのコントロールが可能。HDMIは3端子

◆操作感

電波方式のリモコンはテレビに向ける必要がない。EPGの見やすさは標準的。フリーキーワードやサブジャンルで詳細な番組検索が可能。2画面表示はほぼ無段階でサイズを変更できる

◆画質・音質

肌の色の再現性が特に高い。全体的に精細感がありクリアな画質。映画をリビングで視聴した場合の画質は評価した製品のなかで最も良かった。音はややこもり気味で、薄さを感じた

●画面／40型●サイズ・重さ／幅99.2×高さ69.2×奥行26.5cm●27kg●地上デジタルチューナー／2



①EPG画面の背景は黒色で文字はやや太め。リモコンは2個付属する。細長いタイプは従来の赤外線方式を採用



液晶 AQUOS LC-42GX3W (シャープ)

実勢価格37万8000円

スタンダードな画質で、搭載機能も標準的

派手さはないが、機能、画質ともにごく標準的なモデル。自然で落ち着いた画質が特徴だが、ほかと比較すると「映像の精細感も

っと欲しくなる」(潮氏)。使い勝手などにストレスは感じない。「画質の品の良さ」を求めるのなら検討してもよい。

◆独自機能・将来性

アクトビラは「ベシック」のみ対応。AQUOSファミリンクでレコーダーなどの操作が可能になる。HDD録画機能は非搭載。IrSSに対応し、ケータイの画像を表示できる。HDMIは3端子

◆操作感

リモコンの使いやすさは標準的だが、小さなボタンが多い。EPGは縦表示と横表示の切り替えが可能で解像度も高い。番組検索はジャンルと日時のみ。2画面表示が可能だが、サイズ変更は不可

◆画質・音質

色は比較的自然な印象。おとなしめで落ち着いた画質。暗部の表現力が高い。最大の音量は他モデルよりもやや小さく(HDMI接続時)、音の上昇に合わせて低音が少なくなる

●画面／42型●サイズ・重さ／幅101×高さ73×奥行27.1cm●25.5kg●地上デジタルチューナー／2



①EPGは9チャンネル表示が可能。6時間ごとのジャンプもできる(左)前面右下にIrSS端子を配置②サラウンドをオンにするとセリフが聴きやすい



チェック項目

1 魅力的な独自機能や将来性はあるか

フルHD時代に移行した薄型テレビは、画質以外の機能も重視されるようになる。アクトビラなど動画配信サービスへの対応や独自のリンク機能の充実度を調べた。また、USBなどの拡張端子のほか、HDMIの数もチェック。

2 基本的な操作はどうか

機能が豊富でも操作しづらければストレスを感じる。リモコンや設定メニューの使い勝手をはじめ、EPG(電子番組表)の見やすさや番組検索の柔軟さなど、テレビとしての基本機能の操作感を検証した。

3 画質・音質に不満はないか

今回の検証で比較した製品は「十分合格点に値する画質」(麻倉氏)。しかし、やはりテレビとして画質を抜きには語れない。メーカー間で画質にどのような違いがあるのかをみた。薄型テレビの弱点ともいわれるスピーカーの音質についても検証。

検証にはエイム電子のHDMIケーブルのほか松下電器産業「DIGA DMR-BW700」を使用した



各製品の評価はAV評論家の麻倉伶士氏(左)、潮崎男氏(右)に依頼。一般家庭のリビングルームと同程度の明るさの環境下で検証を行った

液晶 REGZA 42Z3500 (東芝)

実勢価格29万8000円

画質・音質がともに良く機能の多さも大きな魅力

検証した製品のなかで、価格や画質、操作感などのバランスが最も良かったモデル。地上デジタル放送とBSデジタル放送のチャンネルボタンが分かれており、直感的に選局できるリモコンや見やすいEPGなど、常に触れる部分の使い勝手が良い。USB接続したHDDと連係可能な機能も搭載。250GBのHDDに地上デジタル放送を約27時間録画可能。多くの人に薦められる。

◆独自機能・将来性

動画配信サービスは「4thメディア」に対応。アクトビラは現時点では文字情報の「ベシック」のみ。REGZA LINKはレコーダーのほか、USBやLANで接続したHDDなどと連係できる。HDMI端子は3つ

◆操作感

リモコンはボタンにくぼみがあり、手になじんで使いやすい。EPGは新聞に近い表示で解像度も高く最も見やすい。ジャンルやフリーキーワードでの番組検索が可能。2画面表示では画面サイズの変更も可能

◆画質・音質

人物の肌はやや赤みに表示されるが、再現性は良い。全体的に立体感があり、階調も豊富に感じた。音量を最大にしてもバランスが崩れず、破綻しなかった



USB接続でのHDD録画が可能。アイ・オー・データ機器やパファローの製品に対応している



●画面／42型●サイズ・重さ／幅102×高さ69.9×奥行35.2cm●28.4kg●地上デジタルチューナー／2



①EPGの文字は濃淡があり、番組名と内容を直感的に読み分けられる②標準的な音質だが高音・低音のバランスは良く、比較的聴きやすい音

約1万円で録画機能をプラス東芝は拡張性や動画配信で優位フルHDが標準になりつつある薄型テレビ。画質はもはやユーザーの好みやこだわりの問題になり、今後はそれ以外の機能も重視される。動画配信サービスへの対応や機能の充実度などが、製品を選ぶうえで大きな比重を占めるようになるのだ。

そこで今回は、売れ筋である40型クラスの製品のうち、25万〜35万円のボリュームゾーンに絞って、機能や操作性、音質を比較した。

まず初めは、テレビの機能として今後注目したいポイントになりつつあるHDD録画への対応状況をみた。HDD録画に対応しているのはソニー「BRAVIA KDL-40W5000」と東芝「REGZA 42Z3500」。

ただ、両製品ともに単体での録画はできず、ソニーはHDMIで接続するHDD「BRX-A250」(実勢価格4万7800円)、東芝は市販のUSB接続型HDDが必要になる。BRX-A250は、250GBのHDDのほかに地上デジタル/BSデジタルのチューナーを1基ずつ搭載しており、2番組同時録画も可能だ。東芝はテレビ側で受信した映像をUSB経由でHDDに録画する方式。ソニーのように同時録画はできないが、テレビのEPGから番組を選択するだけで録画予約できる「HDDを接続する」というと難しく感じるかもしれないが、使い勝手はシンプルで簡単だった。また、250GBのHDDであれば1万2000円程度で手に入る。機能の豊富さではソニー、操作の一体感やコストパフォーマンスでは東芝が有利だ。

最近注目されている動画配信サービス「アクトビラ」への対応も調べた。検証した製品のなかでは、三菱電機「REAL LCD-H40MZ75」を除くすべてがアクトビラに対応しているが、注意したいのはその内容。動画を楽しめる「ビデオ」に対応しているのは、今のところソニーだけ。シャープ「AQUOS LC-42GX3W」、東芝「松下電器産業「VIERA TH-42PZ70」は文字情報が中心の「ベシック」のみの対応。

ただ、東芝は「H.264エンコーダーチップ」を搭載済み(同社)で、技術的にはビデオの上位版である「ビデオ・フル」まで対応できるようにしている。製品のアップデートは08年ごろを予定しているという。

将来性という意味では、HDMI端子の数にも注目したい。主流のモデルは2〜3端子の製品が多く、ほとんどの場合、レコーダーとの接続に使われている。しかし、最近ではゲーム機の場合、カメラなどにもHDMIが採用されつつあり「3つでは足りなくなる状況はすぐそこまで来ている」(大手メーカー)。HDMI分配器を使う、という手段もあるが、将来性を考えると、初めから端子数の多いものを検討しておいたほうがよい。HDMIを3端子用意しているのは、シャープ、ソニー、東芝。それ以外は2端子だった。

また、薄型テレビを使ううえで、EPGの存在は外せない。「見やすさで

約1万円で録画機能をプラス東芝は拡張性や動画配信で優位フルHDが標準になりつつある薄型テレビ。画質はもはやユーザーの好みやこだわりの問題になり、今後はそれ以外の機能も重視される。動画配信サービスへの対応や機能の充実度などが、製品を選ぶうえで大きな比重を占めるようになるのだ。

そこで今回は、売れ筋である40型クラスの製品のうち、25万〜35万円のボリュームゾーンに絞って、機能や操作性、音質を比較した。

まず初めは、テレビの機能として今後注目したいポイントになりつつあるHDD録画への対応状況をみた。HDD録画に対応しているのはソニー「BRAVIA KDL-40W5000」と東芝「REGZA 42Z3500」。

ただ、両製品ともに単体での録画はできず、ソニーはHDMIで接続するHDD「BRX-A250」(実勢価格4万7800円)、東芝は市販のUSB接続型HDDが必要になる。BRX-A250は、250GBのHDDのほかに地上デジタル/BSデジタルのチューナーを1基ずつ搭載しており、2番組同時録画も可能だ。東芝はテレビ側で受信した映像をUSB経由でHDDに録画する方式。ソニーのように同時録画はできないが、テレビのEPGから番組を選択するだけで録画予約できる「HDDを接続する」というと難しく感じるかもしれないが、使い勝手はシンプルで簡単だった。また、250GBのHDDであれば1万2000円程度で手に入る。機能の豊富さではソニー、操作の一体感やコストパフォーマンスでは東芝が有利だ。

最近注目されている動画配信サービス「アクトビラ」への対応も調べた。検証した製品のなかでは、三菱電機「REAL LCD-H40MZ75」を除くすべてがアクトビラに対応しているが、注意したいのはその内容。動画を楽しめる「ビデオ」に対応しているのは、今のところソニーだけ。シャープ「AQUOS LC-42GX3W」、東芝「松下電器産業「VIERA TH-42PZ70」は文字情報が中心の「ベシック」のみの対応。

ただ、東芝は「H.264エンコーダーチップ」を搭載済み(同社)で、技術的にはビデオの上位版である「ビデオ・フル」まで対応できるようにしている。製品のアップデートは08年ごろを予定しているという。

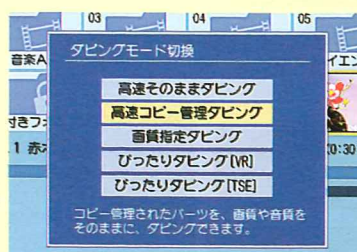
将来性という意味では、HDMI端子の数にも注目したい。主流のモデルは2〜3端子の製品が多く、ほとんどの場合、レコーダーとの接続に使われている。しかし、最近ではゲーム機の場合、カメラなどにもHDMIが採用されつつあり「3つでは足りなくなる状況はすぐそこまで来ている」(大手メーカー)。HDMI分配器を使う、という手段もあるが、将来性を考えると、初めから端子数の多いものを検討しておいたほうがよい。HDMIを3端子用意しているのは、シャープ、ソニー、東芝。それ以外は2端子だった。

また、薄型テレビを使ううえで、EPGの存在は外せない。「見やすさで

チェック項目

1 ダビング10に対応するか

まだ規格の内容が確定していないダビング10だが、新製品のなかにはすでに「対応予定」をうたっているものもある。今からレコーダーを買うのであればダビング10に対応できる可能性の高い製品を選ぶべきだ。各メーカーに調査を行い、その回答を掲載した。



2 基本的な操作はどうか

録画・再生を日常的に行うレコーダーは、EPGやリモコン、録画予約などの操作をスムーズに行えるかどうかが必要になる。EPGの見やすさのほか、予約・録画・再生操作のわかりやすさを徹底的に検証した。

3 ハイビジョン番組を手軽にたっぷり録画できるか

デジタル放送は高画質なぶん、データ量も多い。いかに大容量といえどもHDDや光ディスクの容量には限界がある。次世代光ディスクへの対応や内蔵HDDの容量、AVC記録機能の対応などを中心にチェックした。



DIGA DMR-BW700 (松下電器産業)

実勢価格15万8000円



BDやDVDにAVC記録可能機能が豊富でも操作簡単

次世代光ディスクのBDに対応し、AVC記録も可能な多機能にもかかわらず、わかりやすく、使い勝手の良いモデル。AVC記録はHDDやBDのほかDVDへも可能。画質モードの選択メニューは一覧性があり理解しやすい。EPGは見やすく、最大19局を同時に表示できる。リモコンのボタン数も少なく、難しさを感じさせない。初心者にも買い替えユーザーにも薦められる1台。

◆ダビング10対応

「技術仕様や放送開始までのスケジュールが決まり次第、バージョンアップでの対応を予定しております」(同社)。バージョンアップの方法についても検討中という

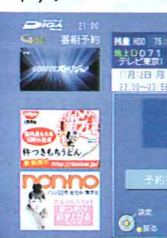
◆操作感

EPGは検証した製品のなかで最も見やすく、解像度も高かった。ジャンル、キーワード、人名での検索が可能だが、フリーワードには非対応。EPGからの録画予約は最短3クリック

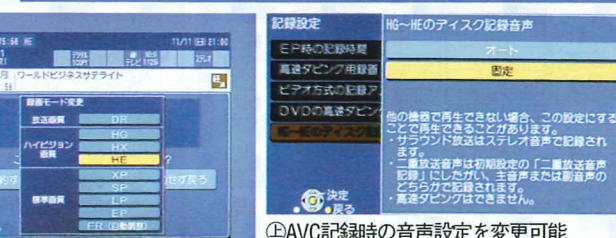
◆ハイビジョン録画

BDのほかDVDにもAVC記録が可能で、1層のDVDディスクにHD画質の番組を最長1時間40分記録できる。HDDの容量は250GBだが、AVC記録に対応しておりディスクを効率的に使える

⑥EPGは最大19局表示が可能で録画モードは9種と多いが、「ハイビジョン画質」などの表記がありわかりやすい



●サイズ・重さ/幅43×高さ5.9×奥行き33.2cm・5.1kg
記録対応ディスク/BD-R/RE、DVD-R/RW、DVD-RAM
地上デジタルチューナー/2



④AVC記録時の音声設定を変更可能



この冬に買うレコーダーは「ダビング10」がキーワード

テレビのアナログ放送が終了し、デジタル放送へ完全移行するまであと3年。デジタルチューナーを搭載したレコーダーの価格もこなれてきた。08年には北京オリンピックも控えており、「そろそろ新しいレコーダーを...」と考えている人も多いだろう。だが、この冬にレコーダーを買うのであれば注意しなければならないポイントがある。それは「ダビング10」だ。現在のデジタル放送の多くは、HDDに録画するとはかのメディアへは「移動」しかできない「コピーワンス」の番組。しかし、今後は9回のコピーと1回の移動が可能になる「ダビング10」に対応した番組も登場する予定だ。利便性が高まるダビング10は今後のレコーダーの必須機能だ。実はダビング10の規格内容は、まだ確定していない。詳細が決まるのは、07年末〜08年春ごろのようだ。だが、一部のメーカーからは「ダビング10対応予定」をうたう新製品が発売され始めた。となると、気になるのがそのほかの製品の対応状況。今回は主要メーカーが発売する普及価格帯のモデル6機種をチョイスし、ダビング10への対応はもちろん、レコーダーとしての実力もチェックした。今回検証したなかでは、東芝「RD-E301」だけが発売時にダビング10への「対応予定」をアピールしていた。そのほかの製品について各メーカーに確認してみたところ、東芝「RD-E301」

プラズマ VIERA TH-42PZ70 (松下電器産業)

実勢価格28万8000円

表現力は高めだが、フィルターが気になる

今回検証したなかで唯一のプラズマテレビ。三菱ほどではないが、音質は良い。全体的な画質は「うるささを感じない画づくり」(麻

倉氏)で見やすいが、発色はやや濃いめ。暗めの映像などでの表現力は最も高いが、低反射フィルターのノイズ感が気になる。

◆独自機能・将来性

○アクトビラは「ベーシック」のみの対応。VIERA Linkはレコーダーなどと連携可能。HDDを接続して録画できる機能は搭載していない。HDMI端子は2つ。前面にSDカードスロットを搭載

◆操作感

○リモコンはボタンや文字が大きく、わかりやすい。EPGは文字が読みやすいが、左側に広告が常に表示される。キーワード、人名などの番組検索が可能だが、フリーワードは登録できない

◆画質・音質

○低反射フィルターのざらつきが気になるが、プラズマならではの表現力があり、映画の暗いシーンなどで力を発揮する。低音が強めだが音質は良い。音量を最大にすると高音が少々ひずむ

●画面/42型●サイズ・重さ/幅102×高さ75.2×奥行き33cm・39.5kg●地上デジタルチューナー/1



⑤EPGは比較的わかりやすい。最大19局分の表示が可能で文字は小さくなるが一覧性は最も高い(左)前面にSDスロットを用意⑥音質のレベルは比較的高い

液晶 REAL LCD-H40MZW75 (三菱電機)

実勢価格34万8000円

高音質が魅力だが、使い勝手はいまひとつ

光沢フィルターを用いた製品。映り込みが発生するが、ほかにはない透明感のある画質が特徴。ただ、「精細感はやや甘め」(潮氏)。

音質は突出して高く、クリアで忠実な再現力を持っている。EPGは見づらく、使い勝手はほかのモデルと比較すると劣りした。

◆独自機能・将来性

△対応している動画配信サービスはない。REALINKはレコーダーの操作が可能。テレビ番組をHDDへ録画する機能は搭載していない。HDMIは2端子。USBなどの拡張端子はない

◆操作感

△リモコンのボタン配置などは汎用的で特徴はない。メニューの反応は遅い。EPGの解像度は低く、やや見づらい。番組表はジャンル検索が可能。2画面表示が可能だが、片方は外部入力の映像

◆画質・音質

○光沢フィルターを採用しているため、透明感のある特徴的な画質。黒色の再現力やコントラスト感が高い。精細感はやや甘め。音質は最も良く、最大音量でもしっかりとした音を再現できる

●画面/40型●サイズ・重さ/幅93.9×高さ65.8×奥行き32.8cm・27kg●地上デジタルチューナー/1



⑤EPGは最大9チャンネル表示(左)光沢仕様で映り込みがあるが「映像に集中すれば気にならない」(潮氏)⑥低音が強めだがバランスの良い音質

映画を見るならソニーが松下 総合力なら東芝が三菱

機能や操作性も大切だが、テレビである以上、やはり画質や音質は気になる。今回の5機種のうち画質がより優れていたのはソニーと東芝。両製品ともくっきりとした画質で、立体感に優れていた。リビングで映画を見るのであればソニーの画質に軍配が上がるが、音質面では東芝がソニーよりもやや優位。画質・音質を総合的にみると、東芝のバランスの良さが際立つ。部屋を暗くして映画を見た場合の画質は、麻倉氏、潮氏ともに松下の評価が高かった。「暗い部屋ではプラズマの力が発揮される」(潮氏)ことから、映画を見るのが多いのであれば松下も候補に入りたい。一方、全モデルのうち、音がひととき

わ良かったのは三菱。「パイプオルガンの技術を応用した」(三菱)というスピーカーからは、低音の効いた存在感のある音が響く。ほかの製品は音質面で大きな差はなく、強いて言えば東芝、松下がほかよりもやや上のレベル。結局、東芝は機能や操作性、画質・音質など3項目のすべてにおいて高めの評価で、買いたい1台といえる。

VARDIA RD-A600 (東芝)

実勢価格12万8000円

AVC記録が非搭載の高級機
ダビング10対応は「検討中」

東芝のハイエンドモデル「RD-A600」のダビング10への対応は「現在検討中」(東芝)。HD DVDにハイビジョン番組の記録が可能で、600GBのHDDを搭載するが、07年6月発売のためAVC記録には対応していない。記事作成時にはテストできなかったが、新製品の「RD-A301」は、ダビング10に「対応予定」(同社)で、HD DVDはもちろん、300GBのHDDやDVDにもAVC記録が可能。利便性を考えれば、新製品を選んだほうがよさそうだ。

⑤現時点ではほかの製品と同様に、コピーワンス番組は移動のみ可能になっている

⑥EPGはリモコンの「クイック」ボタンで表示されるメニューから縦横表示の切り替えが可能

AQUOSハイビジョンレコーダー DV-ACW72 (シャープ)

実勢価格9万9800円

機能はいたって標準的だが
ダブルチューナーを搭載

次世代光ディスクやAVC記録には対応していない。デジタルチューナーを2基搭載しながらも、リモコンのボタンを1回押すだけで録画予約できるなど操作は簡単。ビデオデッキからの乗り換えユーザーなどに向いている。

◆ダビング10対応
「技術的には対応可能ですが、規格内容を確認したうえでデジタル放送を利用したダウンロードでの対応を検討して参ります」(同社)

◆操作感
EPGの解像度は高い。ジャンル検索が可能。録画予約は最も単純でワンクリックで済む。リモコンのスタートメニューボタンは小さい

◆ハイビジョン録画
次世代光ディスクには対応せず、ハイビジョン画質の番組はHDDのみに残る。DVDへはSD画質で記録可能。HDD容量は250GB

HDD
DVD

●サイズ・重さ／幅43.4×高さ6.8×奥行き34.3cm・5.1kg●記録対応ディスク／DVD-R/RW●地上デジタルチューナー／2

録画予約した番組を再度選択すると画質モードの設定などが可能になる

使用メディアを絞り込んだレコーダーも登場

使える記録メディアを絞り込み、操作を簡単にしたレコーダーも登場している。シャープの「BD-AV10」(実勢価格11万8000円)は、BD-REのみに録画できるレコーダー。HDDは搭載しておらず「VHSからの乗り換えユーザーを狙った」(シャープ)。

●AQUOSブルーレイ BD-AV10 (シャープ)



BDビデオやDVDビデオの再生も可能。また、日立の「IV-R1000」(実勢価格5万4800円)はカセット式HDD「iVDR」のロットを2つ持つレコーダー。iVDRに対応した薄型テレビとの連係を考えているという。iVDR間でのダビングも可能だ。

●Wooo IV-R1000 (日立製作所)



“型落ちモデル”には要注意

「ダビング10に「対応予定」をうたう新製品はいいが、気になるのはそれよりも前に発売されたモデルだ。各メーカーに問い合わせると「まだ策定されていない規格なのでなんとも言えない」という回答が大半。もし対応できる性能を持ったモデルがあったとしても、アップデート方法をどうするのか、補足の説明書をどう配布するのか、など多くの問題が残る。そのため実際に対応するかどうかは現時点では全く不明。今すぐにレコーダーを購入する場合、古めの製品を買うことは避けたほうがよさそうだ。

新製品の発売時期には今までのモデルが安くなる傾向が多い。価格が魅力的だが、購入は慎重に考えたい(写真はイメージ)



この冬に買うレコーダーは、ダビング10への対応状況や操作感の良否、AVC記録の幅広さなどで松下のDMR-BW700がベスト。DVDへのAVC記録やデジタルダブルチューナーにこだわらないのであれば価格の安いソニーも選択肢になる。

また、AVC記録はデータの「圧縮率」により画質が異なる。ハイビジョン解像度の場合、圧縮率によってソニーは4段階、松下は3段階のAVC記録モードを用意している。両社の各モードを試してみたところ、録画した番組のデータよりコンパクトにできる下位のモードほど画質が下がる傾向にあったが、従来のDVD録画よりも画質は良い。ただ、スポーツなど動きの激しい映像はなるべく上位のモードを使うほうが良いだろう。

注意したいのが、AVC記録BDの再生互換性。ソニーのT50で作成したAVC記録BDは松下のBW700で再生可能だった。しかし、初期設定状態のBW700で作成したAVC記録BDは、T50では再生はできなかった。作成時にBW700の記録音声設定を「固定」にすればこの問題を回避できる。

BDZ-T50 (ソニー)

実勢価格12万8000円

チューナーは1つだがAVC記録対応

DMR-BW700と同様にAVC記録機能を搭載するが、対象はHDDとBDのみと割り切ったモデル。HDDの容量は250GBと同じだが、デジタルチューナーは1基。実勢価格はDMR-BW700よりも3万円程度安い。DVDへのAVC記録に魅力を感じなければ検討に値する。

◆ダビング10対応
「コピーワンスの緩和規格に対応する予定です。対応時期と方法については、緩和規格の策定を受けて決定、ご案内いたします」(同社)

◆操作感
同社のテレビと同様に、背景が黒色で独特の番組表。解像度は高め。ジャンルやフリーキーワードによる番組検索が可能。番組表からの録画予約は最短2クリック

◆ハイビジョン録画
BDへの録画に対応。光ディスクへのAVC記録はBDのみに可能で、DVDへは従来のようにSD画質での記録になる。HDD容量は250GBだが、AVC記録が可能

HDD
BD
DVD



⑤EPGはジャンルごとに色分けされている⑥録画予約時に録画モードを選択する



④メニューは同社独自の「XMB」

VARDIA RD-E301 (東芝)

実勢価格6万4800円

ダビング10に「対応予定」
AVC記録モードは非搭載

ダビング10へ「対応予定」であることをアピールして登場した新製品。次世代光ディスク「HD DVD」やAVC記録には対応していない。細かな設定やビデオ編集が可能だが、デジタルチューナーが1基など機能はシンプル。

◆ダビング10対応
「技術仕様、放送開始時期などの詳細が決定した後に、バージョンアップで対応予定です」(同社)。方法や時期については未定

◆操作感
EPGの解像度は低めだが、新聞のような横表示のほか、縦表示にも変更できる。フリーワード検索が可能。予約は最短2クリック

◆ハイビジョン録画
HDDは300GBと標準的な容量で、次世代光ディスクやAVC記録には対応しない。DVDに記録する場合はSD画質になる

HDD
DVD

●サイズ・重さ／幅43×高さ6.7×奥行き34.7cm・5.6kg●記録対応ディスク／DVD-R/RW、DVD-RAM●地上デジタルチューナー／1



横表示の場合、表示局数を4、6、8局から選べる。大きい文字も選択可能

DIGA DMR-XW100 (松下電器産業)

実勢価格8万9800円

BDの記録・再生は非対応
基本機能はBW-700同等

BDには対応していないが、それ以外の機能は同社のDMR-BW700とほぼ同等。EPGの解像度はBW700と比較するとやや低めで、最大の表示局数も少ない。DVDにハイビジョン記録が可能なので、用途を割り切れば十分使える。

◆ダビング10対応
対応状況は同社DMR-BW700と同じ。「技術仕様や放送開始までのスケジュールが決まり次第、バージョンアップでの対応を予定」(同社)

◆操作感
ジャンルやキーワードでの検索が可能で、3クリックで予約できるなど仕様は同社DMR-BW700とほぼ同じ。表示局数は最大9局

◆ハイビジョン録画
BDの記録・再生には対応しないが、DVDやHDD(250GB)へのAVC記録が可能。BDへの対応以外は、DMR-BW700とほぼ同じ

HDD
DVD

●サイズ・重さ／幅43×高さ5.9×奥行き32.3cm・4.6kg●記録対応ディスク／DVD-R/RW、DVD-RAM●地上デジタルチューナー／2

同社のDMR-BW700と同様にEPGの左側に広告が常に表示される



DVDにハイビジョン記録可能
松下のBW700が高い評価

一方、視聴することがメインのテレビと違い、予約、録画、再生を行うレコーダーは、その使い勝手も重要なチェックポイントだ。最も使いやすいのは松下「DMR-BW700」。BD記録に対応するなど高機能な製品にもかかわらず、それを感じさせない操作性は秀逸。初心者でも使いやすいはずだ。ソニー「BDZ-T50」も独自のインターフェースを駆使するなど各所に工夫を凝らしているが、わかりやすさという点では松下機に分があった。そのほか、最近注目されているのが「AVC記録モード」だ。ハイビジョンの解像度を保ちながらもデータ量を抑える技術で、従来より長時間の記録が可能。HDDの容量をより効率的に使用したり、光ディスクに長時間のハイビジョン映像を記録できるようにする。今回検証したなかで、AVC記録に対応しているのは、ソニーと松下の製品。ソニーのT50はHDDとBDに

HD DVDはもちろん、DVDにもフルハイビジョン記録が可能！



HD DVD

DVD

	MPEG4 AVC画質 (4Mbps時) での記録可能時間
HD DVD-R (片面1層): 15GB	約7時間
HD DVD-R DL (片面2層): 30GB	約14時間
DVD-R/RW (片面1層): 4.7GB	約2時間
DVD-R DL (片面2層): 8.5GB	約3時間55分

ふつうのDVDへのハイビジョン記録を
可能にした「HD Rec」規格

「ハイビジョンを記録するには“次世代ディスク”が必要」というのは、そもそもユーザー視点から見れば不条理な話で、これだけ普及している“ふつうのDVD”に気軽に、しかも安価にハイビジョンが保存できればそれに越したことはないのである。

このユーザーの願いを実現したのが、DVDの規格制定組織であるDVDフォーラムが正式承認した「HD Rec」規格。これによりDVD-RAMや-Rw、-Rの既存DVDを次世代DVDであるHD DVDと同じフォーマットにすることが可能になり、次世代HD DVDと既存DVDの垣根が消滅した。つまり既存DVDはいわば「小さな容量のHD DVD」ということになり、HD DVDと同じく、デジタル放送をそのままのデータ(MPEG2 TS)で記録できるようになったのである。このHD Recに世界で初めて対応した画期的マシンがRD-A301なのだ。



「HD トランスコーダー」で映像を圧縮

ただご存知の通り、ハイビジョン放送はデータ容量が大きく、既存DVDの容量ではすぐにいっぱいになってしまう。そこでRD-A301は映像データを高効率動画圧縮方式であるMPEG4 AVCに変換する「HD トランスコーダー」を搭載している。これにより、たとえばDVD-Rに約2時間までフルハイビジョンのまま映像を記録することが可能になった。また、2時間に満たない番組をDVDに記録する場合は圧縮の程度を47段階から選ぶこともでき、ディスク容量の範囲内で最適な画質で残すことができる。映像をMPEG4 AVCに変換した場合でも音声は変換せず、最大5.1ch×2ストリーム(2カ国語放送など)まで保存できるのは音質重視のユーザーにはうれしい仕様だ。



この冬、レコーダー選びのキーワードは、 「ふつうのDVDディスク」にも フルハイビジョン記録

多彩な編集機能と使い勝手の良さで、根強い人気を誇る東芝ヴァルディアシリーズ。その真骨頂を極めたのが、HD DVD搭載レコーダー ヴァルディア「RD-A301」だ。HD DVDをリードする東芝が放つ渾身の一台に、「本命」の真実を見る。



フルHD時代のレコーダー選び

お気に入りのタイトルこそ
高画質HDで残したい

フルHD(ハイビジョン)対応テレビの売れ行きが好調だ。

地上デジタルやBS・CSデジタルの番組放送をはじめ、次世代DVDやゲームなどのハイビジョンコンテンツを大画面で楽しむユーザーも増えてきた。だが、録画コンテンツに関してはどうか。お気に入りのタイトルを、高画質ハイビジョンで残せないというジレンマに陥っている人も多いのではないかと、ハイビジョン対応レコーダーならば、ハードディスクに高画質映像を録り溜めておくことはできるが、いずれはDVDにムーブする必要に迫られる。その際、問題となるのが従来DVDにはハイビジョンはそのままの解像度では記録できないということだ。仕方なく、HD映像を標準画質に変換して記録する



ことになるが、画質の劣化は避けられない。

そこで登場したのが、HD DVDなどの次世代DVDに対応したレコーダーである。

次世代DVDのメリットは、なんと一つでも大容量である点だ。

HD DVDなら、放送波のままのフルハイビジョン画質で、1層に約2時間記録可能。しかも従来DVDと互換性を保っているため、過去に録り溜めたタイトルを無劣化で高速ダビングすることが可能。たとえば、DVD6枚に標準画質で記録した連ドラ全話約12時間も、2層HD DVDなら1枚にすっきり収められるというわけだ。

このHD DVDを牽引してきた東芝が、世界初のHD DVDレコーダー「RD-A1」を発売したのは、昨年のこと。そして1年を経た今、ついに「本命」といふべき最強モデルを打ち出した。

最新HD DVDレコーダー ヴァルディア「RD-A301」が「本命」と目される理由はどこにあるのか。その実力を検証する。

ふつうのDVDディスクにもフルHD記録できる HD DVDレコーダーが登場！

DVDで気軽に楽しむ
ハイビジョンライブラリー

ハイビジョンの感動をそのまま残すために、もはや必須といえる次世代DVDレコーダー。その点、フルハイビジョン映像をHD DVDにそのままの美しさで記録できる「RD-A301」は、ライブラリー作成に最適な一台といえるだろう。

だが、本機のアドバンテージはそれだけに留まらない。HD DVDに大容量記録できるのは当たり前。「RD-A301」はさらにその先を行く、「ふつうのDVD」に放送波そのままのフルハイビジョン記録を世界で初めて実現したモデルなのだ。※2007年12月東芝調べ



これを可能にしたのが、新規格「HD Rec」。さらに、放送波そのままでは入りきれないハイビジョン放送のために、高効率映像圧縮方式であるMPEG4 AVCに映像を変換する「HD トランスコーダー」を搭載。これにより例えば1層のDVD-Rに約2時間ものフルハイビジョン記録が可能となったのである。

HD DVDメディアは、現時点ではまだ高価なメディア。ふつうのDVDでフルハイビジョン映像を記録できれば、ライブラリー構築も気軽に済ませよう。

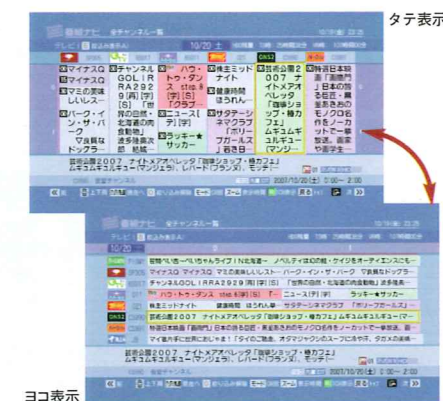
HD DVDとDVDは
単なる「容量違い」じゃない

一方、MPEG4 AVCに高効率圧縮することにより、HD DVDではさらに大容量の録画が可能となる。HD DVD-Rで約7時間、HD DVD-R DLでは約14時間という余裕のボリュームだ。安価で気軽に「ふつうのDVD」も大容量のHD DVDも単なる「容量違いのディスク」として自在な使い分けが楽しめるのが「RD-A301」の魅力である。



タテヨコの切り替えOK 見やすさも使い勝手も ぐんとアップ 「新デジタルWEPG」

従来のヨコ表示にも、新聞のテレビ版と同様のタテ表示番組表にも切り替えられる、「新デジタルWEPG」。デジタル放送、アナログ放送などの主要チャンネルを、ひとつの画面にまとめて表示できるうえ、リモコンで一発選局・録画OK。絞り込み/並べ替え機能を使えば、好みのチャンネルだけを表示させる「マイ番組表」もつくれる。



CMカットも自動録画もおまかせ 賢さ&使いやすさで 一歩リード

本編のみの一発再生から 高度な編集までフル対応

編集機能の多彩さで定評のあるRDシリーズ。その真髄は「RD-A301」にもしっかり受け継がれている。

フレーム単位の編集やチャプター、プレイリストの作成・結合といった細かな作業が、フルハイビジョン映像のまま行えるのである。

しかも、再生・編集・ダビングの一連の作業を「編集ナビ」画面と手元のリモコンだけで完結できるので、初心者でも手軽に高度な編集を楽しめるのが特長。これを利用すれば、好きな場面だけを集めたハイライトシーン集や、お気に入りアーティストのPVライブラリーなどのオリジナルディスクも簡単につくれそう。

一方で、「編集」を意識することなく、ふだんから便利に使えるのが、「おまかせプレイ」機能。

これは、ボタンひとつでCMを除いた本編のみを再生してくれるというもの。映画やドラマを途切れることなく楽しめるうえ、視聴時間や録画時間の短縮にもつながる。

買い自動録画エンジンが 好みに応じて番組チョイス

RDシリーズ自慢のおまかせ機能は、録画時にも活躍する。そのひとつが「おまかせ自動録画」だ。これは、キーワードに応じて自動録画を実行する機能で、2つのモードが用意されている。

まず、任意のキーワードを登録できる「お気に入り予約」では、人名やタイトル、番組情報などの文字列にヒットしたものを自動録画。「シリーズ予約」では同一シリーズの番組を話数が増えることなく、自動で毎回録画してくれる。

また、「お楽しみ番組自動録画」という機能もあり、こちらは事前のキーワード登録が不要。ユーザーが録画・再生する番組の傾向を分析し、好みに合いそうな番組を検索して自動的に録画してくれるという。

いちいち番組表をチェックしなくても、見たい番組から好みの作品までを自動で録り溜めておける「RD-A301」。多忙な人にはうれしい配慮といえよう。

「おまかせプレイ」機能で 本編だけを一発自動再生



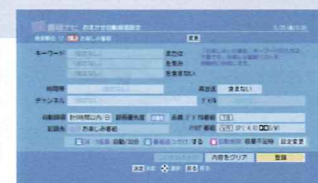
リモコンの「おまかせプレイ」ボタンを押すだけの簡単操作

●おまかせプレイボタンを使うと



2つの「自動録画」機能で 見たい番組をしっかりキープ

キーワードに応じて自動録画を実行する「おまかせ自動録画」には、「お気に入り予約」と「シリーズ予約」の2つのモードを用意。さらに、録画・再生の履歴を参照して好みの番組を自動録画する「お楽しみ番組自動録画」も搭載。見たい番組も、意外な作品との出会いもフォローしてくれる、ユニークな機能だ。



「スタートメニュー」で「録る」「見る」「残す」「消す」に素早くアクセス



電源ONと同時にメニュー画面が自動的に起動。リモコンの上下ボタンで「録る」「見る」「残す」「消す」の各操作画面にアクセスできるので、初心者でも迷わない。

また購入後、最初に電源を入れた場合は、「はじめての設定」が起動。画面ウィザードで選択・決定するだけで面倒な初期設定が簡単に行えるため、買ってすぐ使えるのがうれしい。

初期設定もウィザードで簡単にできる

W録やダビング10にも対応 より自由度の高い録画を実現

15パターンの同時録画で 番組の視聴機会を逃さない

多チャンネル時代のテレビ視聴は、タイムテーブルに縛られない「録って見」が主流だ。「RD-A301」の自動録画機能は、それを実現するサポーターといえる。仮に録りたい番組が重なっても、2つのデジタルチューナーを搭載した「RD-A301」なら、2番組同時録画ができるので安心だ。組み合わせ

2、アナログ1の計7チューナー、15パターンに対応。もちろん「ハイビジョンW録」も可能だ。

また、現在のいわゆる「コピーワンス」を緩和し、9回までメディアにコピーができる「ダビング10」による放送が今後実施される予定だが、本機はこの「ダビング10」対応にも準備ができており安心だ。

破格のロープライス設定で HD DVD普及の起爆剤に

充実の録画・編集機能を搭載し、

高度な作業も手元でらくらく 編集対応「快適リモコン」



番組検索や予約設定を行う「番組ナビ」、録画済み番組の視聴と整理ができる「見るナビ」、高度な編集も手軽なダビングもおまかせの「編集ナビ」—3つのメイン機能を使いやすい位置にレイアウト。各機能に簡単アクセスできる「スタートメニュー」ボタンや、番組を見ながら他チャンネルのチェックや録画予約が行える「見ながら」ボタンなども配備されている。さらに、再生一時停止、早送り・巻き戻しなどの十字配列ボタンは、ほかのボタンより一段高く、手元を見なくても操作できるデザインを採用した。この部分は、文字入力やテンキー、編集ボタンも兼ねており、使い込むほどに便利さを実感できるはずだ。

注目のHD DVDソフト 続々リリース!

「トランスフォーマー」など話題の映画をはじめ、「STAR TREK 宇宙大作戦」シーズン1デジタル・アップグレード版「クイーン/ライヴ・イン・モントリオール'81」など続々登場。好きなタイトルを、HD DVDならではの高精細映像で堪能しよう。



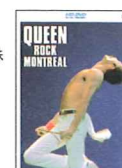
トランスフォーマー
スペシャル・コレクターズ・エディション(2枚組)
12/19発売
発売・販売元:パラマウント・ジャパン
¥4,935(税込)



STAR TREK
宇宙大作戦シーズン1
デジタル・アップグレード版
(HD DVD/DVDコンボ)
12/19発売
発売・販売元:パラマウント・ジャパン
¥25,200(税込)



クイーン/ライヴ・イン・モントリオール'81(2枚組)
12/19発売
発売元:ビデオアーツ・ミュージック
販売元:コロムビアミュージックエンタテインメント
¥3,360(税込)



クイーン/ライヴ・イン・モントリオール'81(2枚組)
12/19発売
発売元:ビデオアーツ・ミュージック
販売元:コロムビアミュージックエンタテインメント
¥3,360(税込)

HD DVD トランスフォーマーキャンペーン

RD-A301を購入すると、応募者に「トランスフォーマー」のHD DVDソフト(2枚組)とオリジナルフィギュア、さらにHD DVD & DVD-Rディスクセット(各5枚ずつ)を進呈するキャンペーンを実施中。購入チャンスは、2008年1月31日まで(応募は2月10日まで)。



12月中旬
発売予定



HD DVD搭載ハードディスクレコーダー ヴァルディア「RD-A301」

●録画メディア/HDD(300GB)・HD DVD-R、HD DVD-R DL、DVD-R、DVD-R DL、DVD-RW ●記録方式/MPEG2、MPEG4 AVC ●チューナー/地上デジタルX2、BSデジタルX2、110度CSデジタルX2、地上アナログX1 ●おもな入出力端子/HDMI出力X1、D1~4映像出力X1、i.LINK(TS)端子X1、LAN端子X1、extension端子X2(USBキーボードの接続対応) ●レグザリンク対応 ●サイズ・重量/幅430X高さ69X奥行き375mm・6.1kg ●価格/オープン

従来の買い方はもう、通用しない——「最後の買い時」を戦い抜く!

ケータイは

分割払いか、それとも一括か
店頭価格はさらに複雑に
この冬、ケータイはどう買つ?



今、替える!

Part 1 買い方・料金 **編** p178

Part 2 サービス・端末 **編** p188

NTTドコモ p192

au p196

ソフトバンク p198

バリューコースにシンプルコース
買い方ひとつで料金も変動
トータルコストはどっちが得?



2年たつても「高性能」
そんな端末を選ぶためには
どこを見て買えばいい?



最近、家電量販店のauの売り場に行ったら人は、少なからず驚いたのではないだろうか。売られているのは、「1円」の値が付いたケータイばかり。最新ではない機種もあるが、ほとんどがここ半年の間に発売されたケータイだ。この冬、各社の料金プランの大変動に際して、「1円端末がなくなる」という報道を目にした人も多いだろう。なにせ、今になっても「1円端末は売られ続けているのか。」

端末の販売からサービスの提供、利用料金の徴収まで「丸抱え」する日本の携帯電話会社(キャリア)にとって、端末の売り上げも月々の料金収入も、収益の材料としては同じ。端末価格を下げようが、利用料金で稼げば問題ない、という簡単な理屈が成り立つ。この路線を堅持すると見られるのがau。従来通り安値を訴求することで、新規契約数を確保する狙いだ。「1円端末」が店頭に並ぶのも、そのためと思われる。

一方、全く逆の道を選んだのがNTTドコモ。この冬からは、端末価格を大きく上げ、その一方で月々の利用料金を引き下げる戦略に出る。当然、魅力ある端末をそろえることが絶対条件になるが、今回の9050シリーズは、いずれも実力派の端末ばかりだ。この冬、各社は新たな料金プランの導入により、スタンスの違いを鮮明にした。これはつまり、月々の利用料金だけを比べて「このキャリアが得」とは、もはや断言できないことを意味する。端末ラインアップやサービスの魅力、月々の利用料金、そしてさらに端末の価格まで考慮したうえで、キャリアを選べる時代がやってきた。今回はそのすべてについて、各キャリアの現状を整理。売り場で見るとポイント、ユーザーが取るべき行動をまとめた。番号ポータビリティ(MNP)開始から1年を経ての大変動。とはいえ、「急激な変化はユーザーを混乱させる。当面は極力、従来に近い端末価格を維持したい」(あるキャリア)。過渡期でもある今は、いわば最後の買い時だ。

au

従来とほぼ変わらないフルサポート
ヘビーユーザーにはポイント優遇も

2万1000円の購入補助が付くフルサポートコースを選ぶ、従来とほとんど変わらない価格で端末を購入することができる。ただ、2年未満で機種変更等をする場合は解除料が発生。一方のシンプルコースでは、新しい料金プラン「シンプルプラン」を利用できる。シンプルプランには無料通話がなく、ほかの割引サービスとの併用もできない。

全端末、買い方は2つ

端末購入時にフルサポートコースを選んだ場合でも、2年以上その端末を利用した後であれば、シンプルプランに移行することができる。

シンプルコース

- 端末購入時の割引はなし
- 期間の縛りはなし
- 新しい料金プランを利用可能

シンプルプラン

	シンプルプランS	シンプルプランL
基本使用料	1050円	2625円
通話料	15.75円/30秒	10.5円/1分

フルサポートコース

- 端末購入時に2万1000円を割引く
- 2年間の利用が原則
- 2年未満の場合、解除料がかかる
- ポイントが従来の2～3.5倍たまる

ポイント付与率

月々の利用額	ポイント(従来比)
5250円未満	4p/105円(2倍)
5250円以上1万500円未満	5p/105円(2.5倍)
1万500円以上	7p/105円(3.5倍)

解除料

12カ月まで	1万8900円
13カ月から18カ月まで	1万2600円
19カ月から24カ月まで	6300円

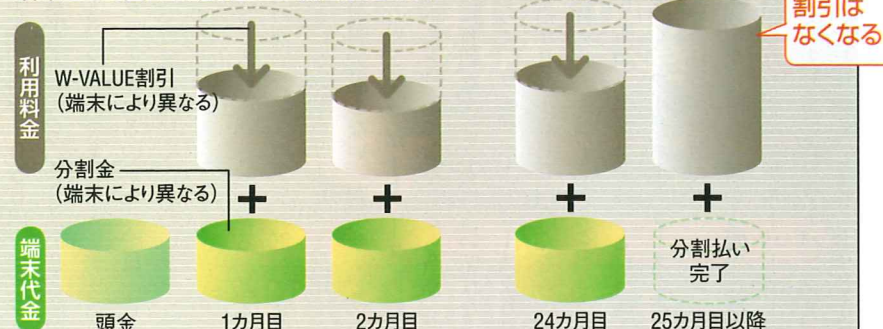
30分以上通話するなら「フルサポートコース」を選ぶ

シンプルプランは「誰でも割」などと併用できない。割引を使った従来の料金プランと比較すると、一概に安いとはいえない。基本使用料が1050円のシンプルプランSの場合、従来の料金プランより安くなるのは、月の通話時間が30分以内のユーザーくらいだ。加えて、フルサポートには端末の割引があるので、多くの場合は有利になる。

ウィルコムも割賦販売に対応 利用料金の割引は最長2年

ウィルコムの「W-VALUE SELECT」は、通常より端末の価格が高いが、月々の利用料金から最長で24カ月間、機種に応じた割引を受けられる購入プラン。端末の代金を分割にもできる割賦販売方式で、初期費用も安く抑えられる。同時に盗難や紛失時の端末交換の費用を最大2万円までサポート。基本的にはW-VALUE SELECTを利用したほうが、割安になりそう。

端末を24回の分割払いで購入した場合



端末が値上がりしたぶんを、キャリアがそのままだと利用料金の値上げに使うのであれば、従来のプランと分離プランのどちらを使ってもユーザーは損をしないことになる。ただ、実際にはそんなに単純ではなく、キャリアごとに仕組みが大きく異なっている。

ドコモの場合、従来とほぼ同じ販売方式の「ベーシックコース」と利用料金が割安な「バリューコース」のいずれかを、端末購入時に選ぶ必要がある。

今回の販売方法変更の目玉が、このバリューコースだ。端末が値上がりするのはどちらのコースでも一緒だが、バリューコースを選べば、基本使用料から一律1680円値引きした格安な料金プランを利用できるようになる。

一見、「お得」とも思える内容だが、果たしてこの新プランは使っているのか。バリューコースの難点は、ベーシックコースで受けられる1万5750円の端末割引がないこと。ただ、月々1680円が利用料金から割引引かれるため、例えば10カ月で、割引の合計額は1万6800円。トータルの割引額がベーシックコースより大きくなる。10カ月未満で機種変更する場合でも、

ドコモは分離プランが得
従来型プランが有利なau

端末が値上がりしたぶんを、キャリアがそのままだと利用料金の値上げに使うのであれば、従来のプランと分離プランのどちらを使ってもユーザーは損をしないことになる。ただ、実際にはそんなに単純ではなく、キャリアごとに仕組みが大きく異なっている。

Part 1

端末を安く買うか、利用料金を抑えるか

買い方・料金

編

NTTドコモ

端末が値上がりするバリューコース
利用料金の割引を月々受けられる

端末を値引きする代わりに利用料金が高いベーシックコースと、端末価格が高い代わりに利用料金が安くなるバリューコースから選ぶ。バリューコースでは、端末代金の分割払いも可能。月々の割引は、分割金を払い終わっても続くため、長く使えば使うほど得になる。

2年間利用した場合の割引額は1万5750円

ベーシックコース

- 1万5750円を端末から割引く
- 2年間の利用が原則
- 2年未満の場合、解除料がかかる
- 料金プランは従来と同じ

解除料

1カ月目	2カ月目	それ以降
1万5120円	1万4490円	月630円ずつ低減(2年で0円に)

905iシリーズ以降は買い方が2つ

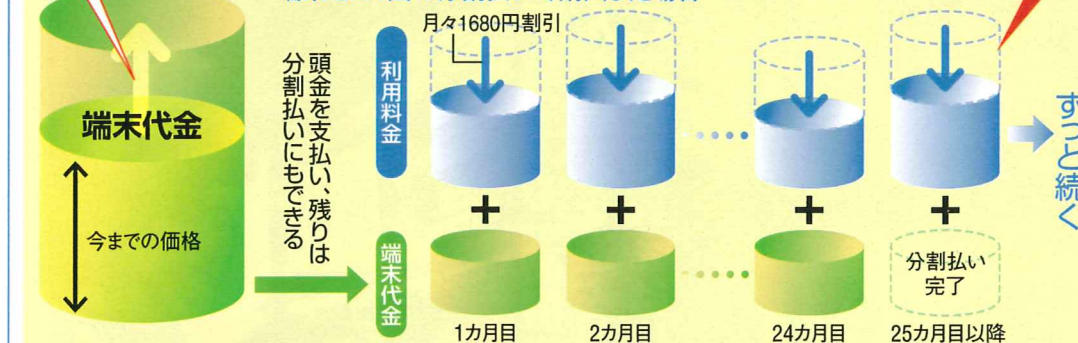
新規、機種変更を問わず、端末購入時に2つのコースから選ぶことになる。905iシリーズ以降に発売される全機種が対象。705iシリーズにも新プランが適用される。

バリューコース

- 端末購入時の割引はなし
- 端末代金の分割払いが可能
- 月額基本使用料が1680円安い料金プランを利用

2年間利用した場合の割引額は合計4万320円

端末を24回の分割払いで購入した場合



とにかく「バリューコース」を選ぶ

2年間利用した場合、ベーシックコースで受けられる割引は初期の端末割引1万5750円のみ。それに対し、バリューコースでは月々の割引額を合計した4万320円となる。また、2年未満で比べても、ベーシックコースには解除料がかかるため、バリューコースが得。

11月、auとNTTドコモが、相次いで端末の新しい販売方法を導入。ケータイの売り方が大きく変わった。背景には総務省の指導がある。9月に公表された「モバイルビジネス活性化プラン」では、端末価格と利用料金を明確に分離した料金プランの必要性が第一に掲げられた。これを受けて携帯電話会社（キャリア）は、「分離プラン」と呼ばれるプランを追加したのだ。そもそもケータイの販売において、キャリアは多額の「販売奨励金」を販売店に支払って端末価格を低く抑え、そのぶんは利用料金を高めに設定することで回収していた。そのため、頻繁に機種変更するユーザーに比べ、同じ端末を長く使うユーザーは損をしていたのだ。確かに、奨励金モデルによって高機能な端末が安く購入でき、新しいサービスが一気に普及したのは事実だが、「今のよう成熟期では弊害も出てきた」（モバイルビジネス研究会 長の齊藤忠夫氏）という。

弊害の一つであるこの不公平さを正



新プラン導入に見るキャリアの事情 ドコモは守り、auは攻めの姿勢に

新しい販売プランに力を入れるドコモ、端末の価格を低く抑える従来の販売方法を推すau、他社に先駆けて販売奨励金を減額した仕組みを導入したソフトバンク。この三者三様の戦略には、各社の思惑が見え隠れする。最近では契約者の獲得競争で他社に遅れを取るドコモだが、それでもシェアは50%以上ある。「ケータイ市場はすでに飽和状態」（販売代理店）。ならば、圧倒的多数のユーザーを抱えるドコモは、今の契約者さえ流出させず、収益を確保すればいい。

現在、ドコモの収益を圧迫しているのは、主に販売奨励金などの営業費用といわれている。販売奨励金は以前からやめたかったというのが実情だろう。他社に対抗して導入した「ひとりでも割50」を含む割引サービスなどで、ドコモは数百億円の減収となった。新プランでは、端末の割引額を1万5750円と明示。一方、今まで販売店に支払われていた販売奨励金や手数料などの合計は、端末1台当たり3万円以上だった。販売奨励金の減額は、すべてユーザーに直接還元されるわけではなさそうだ。差額は収益改善に充てる。そんな目算が透けて見える。一方auは、ドコモに比べ「まだ契約者数が伸びる余地がある」（KDDI）。

販売奨励金を使った低価格戦略で契約者数を稼ぐという体制を、急には変えたくないというのが本音だろう。新しく導入した「シンプルコース」は、端末価格が大幅に上がる。代理店関係者も「積極的に紹介しない」というスタンス。販売現場では、シンプルコースの導入は総務省へのアピールにすぎないとの見方がもっぱらだ。

ドコモやauに先駆けて、販売奨励金を減額したビジネスモデルを確立したソフトバンク。背景には、多額の販売奨励金を投入するだけの資金の余裕がなく、懐具合からしうがなくなっている事情があったようだ。とはいえ、「長期利用を前提とした割引」という施策は見事に当たり、契約数の増加に貢献。今回、そろって「2年間の継続利用」という制限を導入した他社が、ソフトバンクの例を参考にしたこととは、疑いようがない。

今回の総務省のお達しは、利用者にとってわかりやすく、不公平感の少ない料金体系を目指しているもの。ただ、それを受けた現在の各社の料金体系は、「2年間の継続利用」という縛りの部分はかなり目立つものになってしまった。MNP開始から1年がたった今、ユーザーはなぜか、気軽にキャリアを移れない状況に追い込まれている。

NTTドコモ 販売奨励金をやめたい。 純減さえなければ勝ち

ドコモにとって収益の足かせになっているのが販売奨励金だ。今までは、1端末当たり3万円以上の奨励金を拠出。ユーザーが機種変更すればするほど支出が増えていた。そのため、奨励金の減額・廃止は念願だったといわれている。また、成熟期のケータイ市場では、今いる契約者をどれだけ囲い込めるかが重要。ドコモは守りの姿勢を鮮明にした。



ソフトバンク 販売奨励金をあまり出せない

「販売奨励金を大盤振る舞い続ける資金的な余裕がなかったのではないかと」。販売奨励金を減額した仕組みを他社に先駆けて導入した経緯について、業界関係者はそう語る。端末の値上がり嫌うユーザーのために割賦販売を採用。他社が新プランの導入に慎重だったなか、結果的に時代を先取りした形になった。



「販売奨励金を大盤振る舞い続ける資金的な余裕がなかったのではないかと」。販売奨励金を減額した仕組みを他社に先駆けて導入した経緯について、業界関係者はそう語る。端末の値上がり嫌うユーザーのために割賦販売を採用。他社が新プランの導入に慎重だったなか、結果的に時代を先取りした形になった。

モバイルビジネス研究会

有識者から成る「モバイルビジネス研究会」は、9月に報告書を提出し、現行の販売モデルがユーザーにとって不明瞭なビジネスモデルであることを指摘。それを受け、総務省はケータイ各社に、端末代金と利用料金を明確に区分する料金体系の導入検討を要請した。

「端末代金と利用料金を分離すべき」

au 補助金を出してでも ユーザーが欲しい。 ビジネスモデルは 変えたくない



「端末が値上がりすることで、契約者の増加が鈍くなるのを恐れているのでは」（家電量販店）。ドコモを追撃するauは、多少収益が圧迫されてもシェアアップを優先していると考えられる。補助金付きプランを推すのはそのためだ。最近、契約者数は純増を続けており、大きな変化は避けたいというのが本音だろう。

ソフトバンク

端末ごとに異なる利用料金の割引額
最長24カ月間で月々の割引はなくなる

新スーパーボーナスは、通常購入に比べて端末価格が2万~4万円高い。そのぶん、最長で24カ月間利用料の割引が受けられる。割引額は月780~2200円と機種により異なる。端末代金は一括のほか分割払いも可能。例えば24カ月の分割払いの場合に途中で機種変更するときは、残りの分割金をすべて払うことになり、特別割引もその時点で終了する。

全端末、買い方は2つ

現状では、9割のユーザーが新スーパーボーナスを利用して端末を購入している。実際、量販店などには、通常購入を受け付けず、新スーパーボーナス利用に限る店舗もある。

通常購入

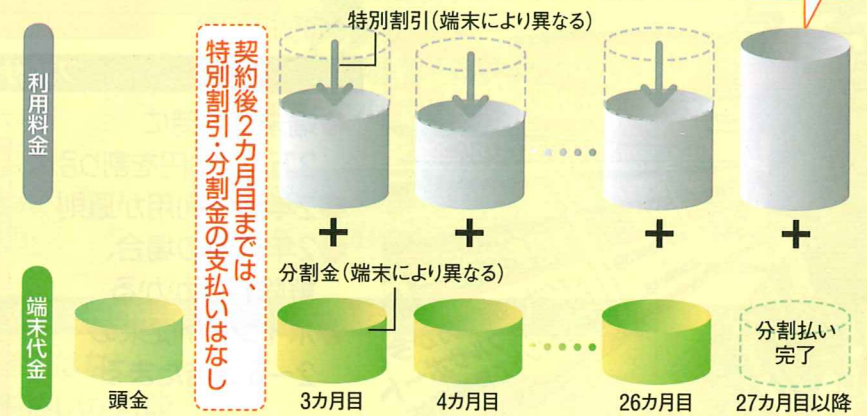
- 格安に端末を購入できる
- 利用料金の割引はなし
- 期間の縛りはなし

新スーパーボーナス

- 端末は通常購入より高額に
- 端末代金は分割払いが可能
- 月々の利用料金が
最長24カ月間割引かれる
- 端末ごとに割引額が異なる



端末を24回の分割払いで購入した場合



短期間で機種変更をしないなら「新スーパーボーナス」を選ぶ

新スーパーボーナスを利用すると、通常購入よりも高い価格で端末を買う必要がある。ただ、2年程度同じ端末を使う人の場合、月々の割引額の合計は、端末の価格差より

も大きくなる。長く使うなら、新スーパーボーナスを選ぶば間違いない。機種によっては、1年未満で機種変更しても新スーパーボーナスのほうが得になるケースもある。

2年契約のベーシックコースには解除料が発生。バリューコースが得だ。ドコモ側の姿勢としても、ベーシックコースは「あくまでも端末の値上りに抵抗のある人向けにすぎない」。auには「フルサポートコース」と「シンプルコース」がある。フルサポートコースは従来型の販売プラン。「シンプルコース」は、ドコモのように基本料から一定額を割引くのではなく、全く新しい2つの料金プラン「シンプルプランS」「シンプルプランL」を利用できる仕組みだ。シンプルプランSは基本使用料が1050円。従来プランで最も安い「プランSS」の基本使用料が3780円であることを考えると、「格安」ともとれる設定だ。では、auでもドコモと同じく、新しいプランを選ぶべきなのか。

実はここに落とし穴がある。基本使用料の安いシンプルプランだが、家族割などほかの割引サービスと併用できず、無料通話もない。割引サービスと併用した「フルサポートコース」の料金と比べると割高になることも多く、圧倒的に有利なプランとは言い切れない。さらに、フルサポートコースより端末価格が2万1000円高くなるので、買い替え時の出費も多くなる。「フルサポートコースを薦める」という販売店も多く、フルサポートコースを選んでおいたほうが無難だ。

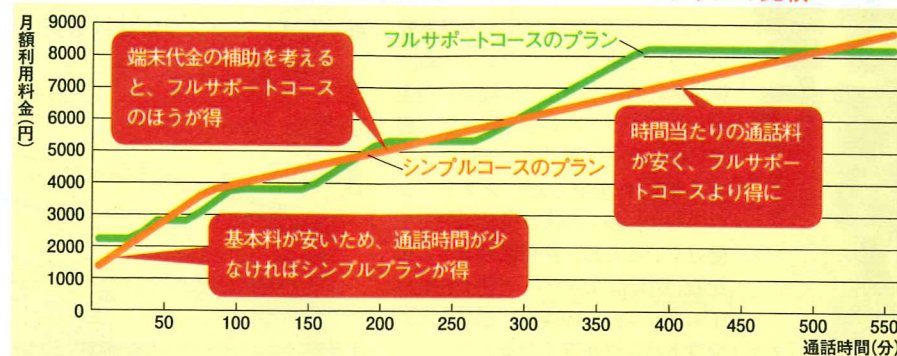
総務省の号令、前から販売奨励金を減額したモデル「新スーパーボーナス」を導入していたソフトバンクモバイル。端末の価格が通常に比べて2万



新しい料金体系「シンプルプラン」。得になるユーザーはいるか

「誰でも割」で基本使用料が半額になったフルサポートコースの料金プランとシンプルコースの「シンプルプラン」を比較すると、1カ月の通話時間が30分以内であれば、フルサポートコースの端末割引を加味しても、シンプルプランのほうが安くなる可能性が高い。290～500分利用の場合も同様だ。ただ、180～220分利用のケースでは両プランの料金差が小さいため、端末の割引分を考えると、シンプルコースのほうが割高になる。

●シンプルプランと誰でも割を適用したフルサポートコースのプランの比較



注) 通話時間によって最適となる料金プランをつなぎ合わせて、各コースのプランとした。料金にはEZWIN月額使用料を含む

注 1カ月の通話時間が30分以内なら、シンプルプランが割安

フルサポートの解除料、ポイントで相殺するにはどれだけ使えばいいか

●ポイントで解除料を相殺できるのは一部ユーザーのみ



注) 利用料金から得られるポイントのうち、新たに上乗せされるポイントを使って試算

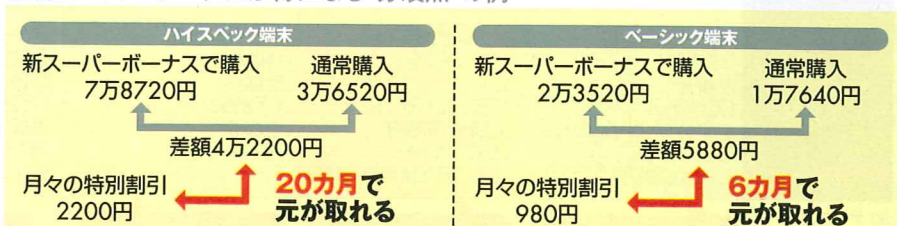
注 月1万5000円程度使うユーザーでも、解除料相殺には1年半

フルサポートコースの場合、2年以内に機種変更をすると、解除料が発生する。12カ月までは1万9600円、18カ月までは1万2600円、24カ月までは6300円。では、機種変更しても損をしないためには、ポイントはどれくらい必要か。試算してみると、1年未満で機種変更するには1カ月に3万3075円以上、1年半未満の場合でも1万4700円以上利用しなければ解除料を相殺するだけのポイントはたまたらない。かなりのヘビーユーザーに限られるのだ。月6000円程度利用する平均的なユーザーの場合は、2年以内に解除すると損になる。

端末が割安な通常購入。新スーパーボーナスより得な場合はあるか

2年間使うと、新スーパーボーナスを利用したほうが割安になるが、2年未満で機種変更をするとうなるか。機種によって異なるが、新スーパーボーナスでは、ベーシック端末なら6カ月、ハイスベック端末なら20カ月以上使うと、通常購入より得になる場合が多い。逆にいうと、この期間内なら、通常購入が得だ。

●新スーパーボーナスが得になる「分岐点」の例



注) 端末価格は、都内ショップでの一例。購入する時期や機種により異なる

注 高機能端末を、1年半程度で買い替えるなら通常購入が得

ソフトバンク

るバリューコースが導入され、「店が勝手に値引きできるのは、頭金の数千円だけ」(販売店)になった。旧モデルが安く売られる状況に変わりはなく、値下りのスピードは遅くなるだろう。auの場合、多くのユーザーにとって得なのはフルサポートコースだが、シンプルコースも全く利用価値がないわけではない。1カ月の通話時間が30分未満であれば、シンプルコースのほうが割安なのだ。待ち受けがメインのユーザーなら選ぶ価値はある。

一方、ヘビーユーザーが気になるのは、新しいポイント制度だろう。フルサポートコースなら、ポイント付与率が月々の利用料金に応じてアップ。フルサポートコースは2年契約だが、たまたまポイントで解除料を支払えば、短期間の機種変更も大きな負担にならない「(KDDI)という。

では、解除料を相殺するには、どれだけのポイントが必要なのか。試算してみると、例えば1年未満で機種変更したい場合、新たに付与されたポイントだけで解除料を賄えるのは、月々3万円以上の料金を払っているユーザーのみ。短期間の機種変更には、やはり相応の出費が求められるようだ。

基本的には、新スーパーボーナスの利用が得なソフトバンク。だが、実は通常購入のほうが割安になるケースもある。ハイスベック端末を購入し、1年から1年半で機種変更する場合がそれだ。ごく短いスパンで買い替えるハイスベック志向のユーザーなら、通常購入を検討したほうがいい。

NTTドコモ

ベーシック

or

バリュー

au

フルサポート

or

シンプル

ソフトバンク

新スーパーボーナス or 通常購入

三者三様の販売方式

見るべきポイントは異なる



バリューコースは、ほかの割引を併用しても得か

バリューコースを利用すると、毎月1680円の割引が受けられる。だが、「ひとりでも割50」などを使うと、1680円の割引が半分の840円になる。これは、バリューコースの割引が、ほかの割引サービスより前の段階で適用されるため。ただ、それでも右図のようにバリューコースのほうが得。2年以内に機種変更する場合も、ベーシックコースには解除料がかかるため、トータルでは常にバリューコースが得になる。

●割引併用時の実質的な割引額を比較

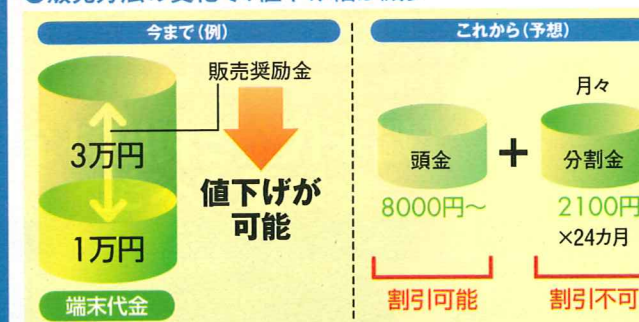


注) ひとりでも割50は2年契約。2年以内での解約には解除料が発生する

注 割引額は目減りするが、それでもバリューコースが有利

端末の「型落ち狙い」は、これからも有効か

●販売方法の変化で、値下げ幅が減少



注) 端末代金、販売奨励金、頭金、分割金の額は一例

注 今までのように、短期間の端末値下げは期待できない

今までは、キャリアが多額の販売奨励金を販売店に提供し、端末の値下げを誘導していた。しかし、端末代金を分割払いにできるプランが始まり、販売店が割り引けるのは頭金だけになった。販売店は赤字覚悟で端末代金を割り引く以外、値引きできなくなった。発売後すぐに端末が割り引かれることは期待できない。期間限定のキャンペーンとして、端末価格から8400円値引きされる今、買っておいただろうがよさそう。

微妙に違う、各キャリアの仕掛け
新しい「買い方」、攻略のツボ

割引プランの併用、端末を買うタイミングといった部分に関しても、各社で注意すべき点がある。

ドコモのバリューコースは、従来より一律1680円安い料金プランを利用できるのが売り。だが実は、その割引額が半分に減るケースがある。

例えば、基本使用料が半額になる「ひとりでも割50」をバリューコースと併用すると、基本使用料から1680円を引いた額に対して、ひとりでも割50が適用される。結果として一律で割引される額は840円になってしまうのだ。ただ、2年間の合計割引額で見れば2万160円。ベーシックコースの端末割引(1万5750円)よりも大きい。やはりバリューコースが得になる計算だ。

もう一つ気になるのが端末の販売価格。従来は、発売したばかりの機種でもすぐに値引きされ、数カ月たてば半額以下になることも少なくなかった。型落ちの端末を狙って買うユーザーも多かったはずだ。売り方が変わった今、この戦法は通用するの。

結論から言うとノーだ。販売店は、販売奨励金を原資にして端末を割り引いていたが、キャリアが販売奨励金を減額したことで、販売店は以前のように端末を割り引くことが難しくなった。さらに、端末代金の分割払いができ

「得」と「損」の境界線が見えてきた

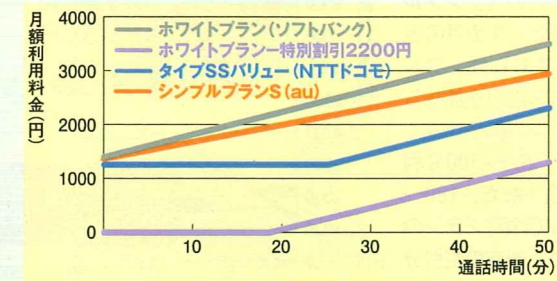
通話料金をキャリア横断で比較

ドコモ、auが対抗プランをようやく投入 特別割引の金額によっては「ホワイト」が有利

あまり話さない人

ドコモとauの基本使用料が最も安いプランとホワイトプランを比較。同じ通話時間を仮定した場合の料金をみた。ソフトバンクには、請求書送付の料金を加算。ドコモはひとりでも割50を適用した。ソフトバンクの場合、多くの人が「特別割引」を受けているため、割引後のプランも比較。例えば、特別割引が2200円（ハイスpek端末の場合）となると、ソフトバンクが安くなる。

●ホワイトプラン vs 他社最安プラン



注)利用料金には、iモード付加機能使用料などを含む

「月6000円」でどれだけ長く話せるかを試算 通話時間もパケット量もソフトバンクがややリード

各キャリアが公表しているデータを参考に、一般的なユーザーが月に払う料金を、6000円に想定。そのうち2000円をデータ通信分とした。この金額内で最適なプランを選び、通話時間、パケット量を試算した結果、ソフ

トバンクがやや有利だった。また、新スーパーボーナスの特別割引 (2200円) を適用した「Wホワイト」も比較。ただ、特別割引が機種により異なるなど、さまざまなケースが考えられるので、参考としての比較にとどめた。

●月額6000円 (通話4000円+データ通信2000円) でシミュレーション

	NTTドコモ (ひとりでも割50)	au (誰でも割)	ソフトバンク (自分割引50)	ソフトバンク (特別割引を加味)
通話時間	3時間8分46秒	2時間42分12秒	3時間8分46秒	3時間16分54秒
パケット量	1万7048パケット	2万60パケット	2万60パケット	2万60パケット
料金プラン	「タイプMバリュー」 (2625円) 無料通話分 142分 追加通話時間(1375円) 46分46秒	「プランM」 (3465円) 無料通話分 144分 追加通話時間(535円) 18分12秒	「ブループランMプランバリュー」 (2520円) 無料通話分 142分 追加通話時間(1375円) 46分46秒 請求書送付105円	「Wホワイト」 (1960円) 特別割引-2200円 無料通話分なし 追加通話時間(4135円) 196分54秒 請求書送付105円
パケットプラン	パケットパック10 (1050円) 定額分 1万パケット 追加分(740円) 7048パケット iモード付加機能使用料(210円)	ダブル定額ライト (1050円) 定額分 1万2500パケット 追加分(635円) 7560パケット EZ WIN月額使用料(315円)	パケットし放題 (1029円) 定額分 1万2250パケット 追加分(656円) 7810パケット S!ベーシックパック(315円)	パケットし放題 (1029円) 定額分 1万2250パケット 追加分(656円) 7810パケット S!ベーシックパック(315円)

注) データ通信分はiモード付加機能使用料などを含む。ソフトバンクのみ請求書送付の手数料を付加。通話はすべて他社へのものとした

通話時間はソフトバンクに並ぶが、パケット量は2段階定額のほかの2社に譲る
通話時間はほかの2社より30分弱短い
通話時間はドコモと並んで長く、パケット量もauと同じくらいになった
特別割引を適用して試算した参考例。左の3つとは同一条件ではない

料金体系が大幅に改変されたことで、今まで以上に料金プランが複雑になった。ここでは、新しい通話プランを利用した場合に、どのキャリアが最も安いのかを比較した。

まず気になるのが、基本使用料が880円のソフトバンク「ホワイトプラン」だろう。今回、ドコモとauも対抗となる低料金のプランを投入。ドコモでは「ひとりでも割50」を適用した「タイプSSバリュー」が最も安いプランになった。基本使用料は1050円で、1050円分の無料通話が付く。auの場合は「シンプルプランS」がそうだが、こちらも基本使用料が1050円だが、無料通話はない。

月に0.50分通話した場合 (不特定多数への通話を想定) に、利用料金はいくらなるかを比較したところ、ドコモが最も安くなった。ただ、ソフトバンクのユーザーの多くが新スーパーボーナスの特別割引を受けているため、この割引を適用したホワイトプランでも同様に比較した。

例えば、特別割引が2200円 (ハイスpek端末を購入した場合) に対応のケースは、ソフトバンクがドコモよりも大幅に割安になった。さらに、ホワイトプランでは1時から21時の間なら、ソフトバンクユーザー同士の間で無料になる。そう考えると、低料金プラン対決はソフトバンクにやや分がありそうだ。

とはいえ、これらはいずれも通話時間が少ない人向けのプラン。各キャリアが発表しているデータをもとに、平均的なユーザーの例として、月に6000円を利用するケースを想定。この料金内で最適なプランを選び、通話時間とパケット量をそれぞれ比較した。長く話せ、パケット量が多いキャリアが得といえる。

結果として、ここでもやはりソフトバンクがやや有利になった。ソフトバンクのブループランは、ドコモの料金プランをコピーしたモデルのため、通話時間はドコモと変わらない。加えて、パケット量はドコモより多く、auと同程度だった。もともと多く話す人の場合 (月額1万円の利用を想定) でも、同様に試算してみたが、ソフトバンクが

注) 表内のシミュレーションは、1人利用のユーザーが利用した場合の計算値。最も効率的と思われるプランを選んだ。基本使用料は割引サービス適用後の金額で、不特定多数への通話を想定。算出した通話時間などは少数点を四捨五入した。無料通話分の時間はパンフレットに掲載されている数値を使用。条件をそろえるため、ソフトバンクには請求書送付の手数料を加えた。通話時間は計算上の数値。ドコモの場合、無料通信分を通話・パケットの両方に適用可能。通話とデータ通信の割合により、最適プランが異なる場合がある

多く話す人・その他

●1万円以上「話す」人

月1万円の利用料金をすべて通話に使う場合、ドコモは「タイプLLバリュー」、auは「プランLL」、ソフトバンクは「ブループランLLプランバリュー」が最適なプラン。「月6000円」の場合と同じように試算したところ、ソフトバンクの通話時間が3キャリア中で最も長くなった。通話できる時間は1000分程度。auとドコモに比べて、1時間以上も長く話すことができる。

●家族、仲間で使う人

ホワイトプラン、もしくはWホワイトを使う場合には、月額無料で「ホワイト家族24」が付けられる。家族がソフトバンクユーザーであれば、24時間家族間の通話が無料。他キャリアの家族向け割引サービスでは、家族間の通話が無料にはならないため、家族で同一キャリアのケータイを持つならば、ソフトバンクが有利だろう。

●月々の割引がある2社 実質的な端末価格は?

ドコモのバリューコースでひとりでも割50を併用すると、2年間の割引額は2万円強。高機能端末の予想販売価格は5万円台後半。実質3万~4万円になる。ソフトバンクで高機能端末を買う場合、新スーパーボーナスの合計割引額は5万円強。端末販売価格が8万円台後半。差額は3万~4万円。一例ではあるが実質負担額に大差はなさそうだ。

均的なユーザーの例として、月に6000円を利用するケースを想定。この料金内で最適なプランを選び、通話時間とパケット量をそれぞれ比較した。長く話せ、パケット量が多いキャリアが得といえる。

結果として、ここでもやはりソフトバンクがやや有利になった。ソフトバンクのブループランは、ドコモの料金プランをコピーしたモデルのため、通話時間はドコモと変わらない。加えて、パケット量はドコモより多く、auと同程度だった。もともと多く話す人の場合 (月額1万円の利用を想定) でも、同様に試算してみたが、ソフトバンクが

有利な傾向にあった。

利用料金だけで見れば、やはりソフトバンクがやや優勢という結果になった。だが、今回、ドコモとauが新しいプランを導入したことにより、ソフトバンクと2社との料金の差は、あまりなくなつた。ソフトバンクの優位性は揺らいできている。周りにソフトバンクユーザーが多ければ、通話無料などの特典も生きてくるが、それを目的にするユーザー以外、あえてキャリアを移動するほどではない。各キャリアでの最適な端末の購入方法や料金プランを選ぶことが、損をしないための最良の方法だろう。



大結論

今回の改変で、あえてキャリアを移る必要なし

新しい販売方法、料金プランが導入され、「利用料金」「割引」「端末代金」が複雑に入り組んだ体系になった。今後は、このトータルのコストを考える必要がある。利用料金だけに限れば、ソフトバンクが優勢ともいえないが、周りにソフトバンクのユーザーが多い人以外は、あえて今、キャリアを移動するほどでもないだろう。

ドコモユーザー

どのようなユーザーでも バリューコースを選ぶのが得策

長く通話する人、あまり通話しない人。1年で機種変更する人、3年以上同じ端末を使う人。ドコモの場合、どんなユーザーでもバリューコースを利用したほうが得になる。バリューコースでは、端末代金の分割払いが可能になったが、分割でも一括でも端末にかかるトータルのコストは変わらないので、どちらか好きなほうを選べばいい。

auユーザー

フルサポートを選ぶのが無難 特にヘビーユーザーには有利に

基本的にはフルサポートコースが有利な場合が多い。フルサポートコースでは、利用料金に応じてポイントの付与率がアップする。2年未満で買い替えたと解除料が発生するため、一般的なユーザーは2年間は機種変更しないほうが無難だろう。ただ、ヘビーユーザーであれば、ポイントで解除料をある程度相殺でき、2年以内に機種変更しても負担が少ない。

ソフトバンクユーザー

高機能端末を短期で替えるなら 通常購入のほうが割安になる

新スーパーボーナスの場合、通常購入よりも数千~数万円ほど端末が高くなる。その代わり、特別割引という名目で、月々の利用料金が割り引かれる。長くケータイを使えばそれだけ割引を多く受けられるので、割引の合計額は大きくなる。逆にいえば、短い期間なら、月々の割引を受けるよりも、通常購入で端末を安く買ったほうが得になる場合が多い。

勝手に他人と比較する体脂肪計

健康機器メーカーがMVNO事業に参入すれば、ただ計測するだけではない健康機器の登場も期待できる。例えば体脂肪計なら、体脂肪のデータをサーバー上に保存し、あとでグラフ化して見直したり、似た体形のユーザーの体脂肪データをダウンロードして比べたり、といったことが可能。



レシピを更新できる炊飯器

組み込みソフトなどの進化により、最近の調理家電は複雑な調理もこなせるが、通信モジュールを内蔵すれば、さらに「レシピ」のダウンロードも可能。家電メーカーがMVNO事業を立ち上げれば、配信されるレシピの内容で調理家電を選ぶ時代が来るかもしれない。



あらゆる家電がケータイを内蔵？
MVNOが生む
新たなケータイのかたち

端末メーカーが今後の有力な市場と見ているのが、実は家電だ。既存の家電製品への通信モジュールの組み込みは、技術的には容易。あとは家電通信に特化したMVNOが現れれば、ケータイと家電の融合が一気に進む可能性がある。

一方、総務省国内でも具体案が出ているとされるのが、サービスの提供地域を限定することで差別化を図るMVNOだ。大手のキャリアがカバーできない、局地的なコンテンツやサービスに特化することで、少ない加入者数でも事業化が可能だ。

“超”地域密着型ケータイ



大手キャリアもローカルコンテンツには力を入れているが、極端に狭い地域に限定したMVNOの展開も、現実的に考えられる。自治体と組んだMVNOが現れれば、台風の際に避難情報が配信されたり、近隣の住民にボタン一つで通報メールが送れたり、といったサービスが期待できそう。

買い替えの選択肢を狭める「SIMロック」
ただし現状では解除されてもメリット薄い



海外では、キャリアを変えてもSIMを差し替えれば同じ端末が使えるケースが多い

総務省の研究会で、MVNOなどと並んで大きなテーマになったのが、SIMロックの解除。現在、各キャリアから購入した端末は、キャリアのSIMカードを入れないと多くの機能が使えない。キャリア側で販売奨励金を積んで売った端末が、ほかのキャリアで使われないための処置。これがいわゆる「SIMロック」で、ユーザー側の端末の選択肢を狭める大きな原因になっている。ただ、現状では各キャリアのサービスの仕様がバラバラなため、SIMロックが解除されても、別のキャリアでは電話機能しか使えない、という事態が起こりえる。ユーザーにとってもあまり利益はなく、当面はSIMロック付きの端末が主流であり続けるだろう。



④国内でも、スマートフォン市場ではSIMロックフリーの端末が目立ってきた。ただし海外メーカーのものがほとんど



⑤SIMロックフリーが主流の国では、キャリアにかかわらず端末が使えるため、中古端末の市場が成立しているケースも

しかし、これを有効活用するための、一つの手段とも捉えることができる。

イー・モバイルのネットワークを使ったMVNOとして、最初に事業を開始するのがNECビッグロップだ。ビッグロップの会員向けに、パソコン用のデータ通信カードでサービスを提供。月々の利用料金はイー・モバイルとほぼ同じだが、データ通信カードがレンタルで提供されるので、イー・モバイルに加入する場合に比べ、初期費用を抑えることができる。このように、まずはデータ通信の分野で、何らかのコストメリットを出したサービスが増えてくるはずだ。

だが、その先にはさらに大きな変化が待ち受けている。

「過当競争といわれながらも、なぜ国内の端末メーカーはケータイをつくるのをやめないのか。それは、MVNOの時代を見越しているからだ」(市場調査会社)。自社の家電製品に通信モジュールを組み込み、ネットワークを利用した機能を付加する。そのために欠かせないのが、MVNOだ。「単に無線機能を持った家電で終わらせないためにも、魅力的なサービスが不可欠。既存のキャリアでは力不足で、それこそ自社のMVNOを立ち上げ、一からサービスをつくり込む必要がある」(端末メーカー)。

自由にMVNOが参入できる環境づくり——それは実は、「ケータイと家電の融合」を現実のものにするための、大きな課題でもあったのだ。08年、業界は大きく動き出すとしている。

MVNO「元年」が到来？
08年はキャリア増加の可能性も高まる

MVNOの参入促進は、総務省の強い方針。総務省の設置した研究会は、各キャリアの接続料を透明化させ、参入障壁を下げる方針を打ち出した。加えて、日本通信がすでにドコモ回線でのMVNO事業開始を表明。ドコモ側の料金設定などを巡り総務省の裁定を仰いでおり、結論によってはMVNO増加の大きな弾みになる。

MVNOとは？

Mobile Virtual Network Operatorの略で、既存キャリアのネットワークを借りて事業を展開するケータイキャリアを指す。低コストで始められるので、

新規事業者が今までにないサービスを展開しやすい。また、既存キャリアにとっても、ネットワークの空き容量を有効活用できるというメリットがある。

安価なデータ通信事業者が増加する
モバイル仕事環境には強い「追い風」



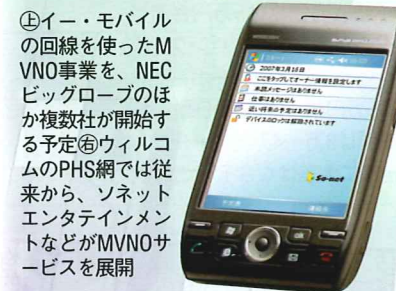
今後も利用の伸びが期待できるデータ通信の分野で、まずはMVNOが増えることが予想される。データを圧縮することでネットワークの利用効率を上げるなど、コストメリットを出しやすいという利点もある。パソコンからの利用に的を絞った格安

サービスなどの登場も期待できそう。一方、音声サービスを基本とする場合、「1回線当たりいくら」の設定でネットワークを借りる例が一般的。値下げの余地があまりない。サービスの差別化も容易でなく、大手の市場に割って入るのは難しいだろう。

⑥ウォルト・ディズニー・ジャパンはソフトバンクとの「協業」で携帯電話サービスを開始予定。写真は、ソフトバンク向けの既存コンテンツ



キャラクターコンテンツは既存キャリアも展開。MVNOでの事業化には厳しさも



④イー・モバイルの回線を使ったMVNO事業を、NECビッグロップのほか複数社が開始する予定⑤ウィルコムは従来から、ソネットエンタテインメントなどがMVNOサービスを展開



⑥MVNOへのネットワーク開放が義務化された香港。事業者が乱立し、キャリアショップが隣りあう場所もある



⑧香港ではMVNOの参入もあり、激しい料金競争が起こった。事業者側の疲弊など負の側面も(左)データ通信用の格安プリペイドサービスなど、サービス形態が多様なのも特徴

各社の料金プランの改変は、ケータイ業界の次なる激動の前触れにすぎない。08年は、携帯電話会社が一気に増える年になりそう。しかも、その携帯電話会社は自前の通信網を持たない。既存のキャリアの通信網を借りて営業するのだ。

MVNO(仮想移動体通信事業者)と呼ばれる「間借り」型の携帯電話会社は、海外では一般的な存在だ。基地局を建て、ネットワークを一からつくれる企業はしよせん限られている。だが、それらの企業は携帯電話事業を展開できないのでは、健全なサービス競争が起らない——こうした発想のもと、MVNOの受け入れを既存キャリアに義務づける国も多い。

日本でも、MVNOの促進により市場全体を活性化させようという機運が高まっている。この冬、既存キャリアの料金体系は大きく変動したが、裏には「端末販売とネットワークのコストを分離せよ」という、総務省の強い意向があった。ネットワークだけを借りるMVNOが、公正な契約のもとで事業を始められる環境をつくる、という意味合いもあつたのだ。

ただでさえユーザー奪い合いの様相を呈している国内市場で、「既存キャリアが次々に新規事業者を受け入れるわけがない」(端末メーカー)という見方もある。ただ、既存キャリアにとってもメリットがないわけではない。すでにMVNOの受け入れを発表しているイー・モバイルは、「販売チャネルを増やすイメージ」と説明。ネットワ

料金改変の次はキャリア乱立時代
ケータイと家電の融合が始まる

つい加入しがちなオプションサービス。内容、料金はキャリアで違い

一度は使う基本的な部分
留守番電話や着信の通知、キャッチホンなど、誰もが使うサービスにも各キャリアで料金に差がある

フェリカ端末に欠かせない
端末紛失時に電子マネー機能を止めるために必須の「遠隔ロック」も、au以外の2キャリアが有料

「2年縛り」で重要性を増す
端末を長く使う時代、保証外の修理も想定するべき。月額料金のかかるサービスを2社が提供している

各社はここにて、アフターサービスの内容を相次ぎ変更。端末の利用期間が延びることへの配慮を見せろ狙いのようだ。サービスのラインアップには大きな

差がないが、キャッチホンや遠隔ロックが有料のドコモとソフトバンクに対し、auは無料。修理・サポートの部分に関しても、費用対効果が高いのはauだ。

●ドコモは最大4つのサービスへの加入が必要で煩雑

オプション名	NTTドコモ	au	ソフトバンク
留守番電話	無料	無料	無料
圏外時の着信通知	オプションパック割引への加入が必要(月420円)	無料	基本オプションパックへの加入が必要(月498.75円)
キャッチホン	無料	無料	基本オプションパックへの加入が必要(月498.75円)
電話帳バックアップ	ケータイあんしんパックへの加入が必要(月210円)	無料	基本オプションパックへの加入が必要(月498.75円)
遠隔ロック	1回315円(利用登録が必要)	無料	基本オプションパックへの加入が必要(月498.75円)
端末の検索	2年後以降に1回	1年後に1回、3年後に1回	1年後以降に1回
無料電池付与	ドコモプレミアクラブへの加入が必要(無料)	安心ケータイサポートへの加入が必要(月315円)	あんしん保証パックへの加入が必要(月498.75円)
保証外の修理	2年後以降に1回 有料の場合も	5250円で端末を交換	通常購入より割安な価格で端末を交換
水濡れ、全損時の対応	ケータイ補償お届けサービスへの加入が必要(月315円)	5250円で端末を交換	通常購入より割安な価格で端末を交換

すべて加入すると→ 月892.5円 月315円(端末の検索は除く) 月997.5円

注)ドコモの場合、「ケータイあんしんパック」と「ケータイ補償お届けサービス」に同時加入すると、月々52.5円の割引が受けられるため、上記の合計額になる。auの「保証外の修理」については、安心ケータイサポート未加入のユーザー向けにも割引サービスがある

全サービス利用ならauが安い。基本部分の「無料」が光る

端末の2年利用を前提に考えると、重要度が高いのは「修理・サポート」の部分。一概に比較できない面もあるが、月315円の出費でいざというときの修理が無料になるauが

魅力的に映る。何より、留守番電話や遠隔ロックが無料なので、他キャリアとは違いこの部分での出費を抑えられる。トータルコストを考えれば、auが最も優れた内容といえる。

6年のMNP導入時には、「キャリア間のサービス競争が加速する」との見方もあったが、今回の冬商戦も、強いインパクトのある新サービスには乏しい。ドコモやソフトバンクでは、従来より高速な通信方式(HSDPA)に対応した端末も増えてきたが、パソコンのように動画を次々にストリーミングで再生するには、「インフラも端末もまだまだ力不足」(端末メーカー)。アップロード速度の向上を進めるauも、双方方向通信を生かした目新しいサービスの導入までには至っていない。

既存のサービスは着実に進化しているが、1年前に比べ、対応端末に買い替えるように思えるほどの進化があるのは、ドコモに限られる。905iシリーズでは、GPS機能の標準搭載と併せ、各端末共通で新たな地図ソフトをプリインストール。横並びで採用する高精細なVGA液晶を生かした、緻密なナビゲーション画面が特徴だ。飲食店や駅出口などの情報も充実し、実用度が高い。海外ローミングに関しては、905iシリーズではGSMローミング対応が標準スペック。ドコモのサービス面での主な弱点は、この冬の端末でほとんどカバーされると考えていい。

auも、発売予定のハイスペック端末向けに「ウォークマン連係」などの新サービスを用意するが、万人向けではない印象もある。国際ローミング対応が進まないのも気になる部分だ。ソフトバンクは音楽分野の強化を打ち出しているものの、同じWMAフォーマットでドコモが強力なサービスを展開しており、新鮮さには欠ける。この冬は全体に、サービス面での動きは少ないように見えるが、実は意外に動いている部分もある。それが、アフターサービスだ。10月にはソフトバンクが、11月にはドコモとauが、相次ぎアフターサービスプランを改変した。「パック」化されたサービスの組み合わせと、料金の改定を行っている。こうした動きは、料金プランの大変動と無関係ではない。今後、端末の購入にあたっては、実質2年間の「拘束」が当たり前になる。同じ端末を使う期間が延びれば、ユーザーの目は当然、アフターサービスに向くだろう。キャリアがサービスを充実させるのは、当然の流れだ。

店頭では、アフターサービスプランに加え、留守番電話など基本サービスへの同時加入を勧められることも多い。また、フェリカ機能付き端末を使うなら、セキュリティ関連のサービスも気になる。紛失時に端末の機能を止める「遠隔ロック」サービスや、GPSで端末を探すサービスなどがそれだ。いずれも使った分は料金がかかるサービス。だが、新規加入者を想定し、すべてのサービスに加入した場合の料金を比べると、キャリア間で大きな開きがある。auなら月315円の出費で済むが、ドコモ、ソフトバンクの場合、すべてのサービスを利用するには1000円弱かかる。ユーザーにとっては、大きな負担。必要なサービスを吟味するしかないだろう。

注)上記、各社のオプションサービスは3G契約向けのもので、利用額と利用方法はあくまで一例。実際の利用額はユーザーによって変動し、例えばソフトバンクには有料の留守番電話サービスも存在する。また、基本的には端末単体で完結するサービスを考慮しており、電話帳をパソコンでバックアップする、といったケースは想定していない

サービス・端末 編

“基礎体力”向上を図るドコモ ソフトバンクはWMA対応打ち出す

ここ1年は、各キャリアとも既存サービスの改良、拡充に専念。MNP導入前に期待されていたような、コミュニケーション系サービスでの大きな動きはなく、全体に新味には乏しい。そんななか、弱点を急速に補強したのがドコモ。GPS系のサービスを

コンテンツ強化で目立つドコモ 見直すべきはアフターサービス



④孫社長は音楽配信に対応できる点を強調⑤ドコモの新しい地図ソフトは高機能で売り

●905i共通で地図ソフトを一新

従来はメーカーによってプリインストールの地図ソフトがバラバラだったが、ゼンリンデータコム製で統一。「iエリア」などとの連係も強化され、実用性が高い。

●国際ローミングに標準対応

905iシリーズは大多数がGSMローミングに対応。中国や米国でも使える端末が一気に増える。iモードが利用できる国・地域も拡大し、利便性は大きく向上している。

●HSDPA専用の動画配信を開始

「ミュージック&ビデオチャンネル」の名称で、大容量の動画配信を開始。MTVなど、有力なコンテンツメーカーも参加する予定で、一度見てみる価値はありそうだ。



⑥地図ソフトはVGA表示に最適化されており、高精細。周辺の店舗の情報も充実している⑦ワンセグ特化型などを除き、主力端末は軒並みGSMローミング対応に

NTTドコモ

au

ソフトバンク

●ウォークマン連係機能を提供

対応する端末でダウンロードした着うたフルを、パソコン経由でウォークマンに転送可能になる。ただ、そもそもケータイで音楽を聴くユーザーにはメリットは薄い。

●待ち受け画面用のアプリを配布

「au one ガジェット」と呼ばれるサービスに対応する端末では、待ち受け画面に電卓、ウェブ検索など小型の機能を表示可能。使い勝手の向上に多少は貢献しそうだ。

●ポータルを「au one」に改編

EZウェブのポータルを「au one」に改称。Gmailをカスタマイズした、無料の「au one メール」サービスも開始したが、機能は通常のGmailとほぼ同一のもの。

●音楽配信との連係機能を強化

WMA再生に対応した端末を投入すると同時に、音楽配信サービスと連係した楽曲管理ソフトを提供。対応端末なら「mora win」などで購入した曲を聴けるので便利。

●「Yahoo!ケータイ」を改良

料理のレシピを検索すると、レシピのサイトの抜粋が最初に表示されるなど、検索結果の表示を改良。ポータルの機能なので、最新端末でなくとも恩恵を受けられる。

●「高速オンラインゲーム」開始

通信方式の見直しにより、従来の数倍のレスポンスで対戦ゲームができるようになった。特にアクションゲームなどで威力を発揮するが、ゲームの数はまだ少ない。



⑧WMA再生対応の端末向けに、「S!ミュージックコネクト」の名前でソフトを提供。音楽CDからの取り込み機能も内蔵している⑨例えば「有楽町 イトシア」で検索すると、有楽町駅周辺の地図が真っ先に表示される

ハイスパック端末

主なスペックは同じでも、使い勝手は同じではない

VGA液晶、3.5G高速通信(HSDPA)対応は当たり前。機種ごとの差は非常に小さく見えるが、各メーカーが強みとする部分の機能や、ワンセグ視聴に配慮した端末デザインなど、スペックに表れにくい部分で依然大きな違いがある。

1 2年後も色あせない特徴を持つか

ブルートゥース、5メガカメラ、指紋センサーなどは、まだ内蔵している機種が少ない。2年もの間、使い続けることを考えると、こうした「あれば確実に便利な機能」を先取りできていることが重要。



①ブルートゥース内蔵の機種も増加中。ワンセグの音声も無線で飛ばせる端末も

2 高機能を生かせる「かたち」か

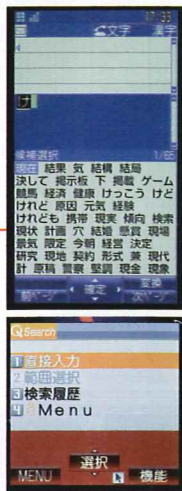
高価な機種を選ぶなら、ワンセグ、音楽など、機能ごとに「かたち」への配慮があったほうが、使う気にもなりやすい。机に置いたとき、自然な角度でワンセグが見られるのは必須といえるだろう。



②充電台に置いたときだけでなく、端末単体で机に置いたときも見やすいほうがより親切だ

3 価格にふさわしい使い勝手か

基本部分の使い勝手は、どの端末も問題ないレベル。差が出るのはワンセグ機能だ。メールを書きながらの「ながら見」に加え、録画しながらの再生(タイムシフト)もできれば、なお便利だ。



③(左)予測変換など基本部分の差は縮まりつつあるが、各社とも独自改良を続ける

ベーシック端末

まだ続く薄型化競争。サイズと機能のバランスが命

ワンセグ対応機はさらに増加、厚さ9mm台ながらフェリカ内蔵の機種も発表された。安くても長く使える端末を選ぶために、サイズと機能のバランスがうまく取れているかどうかを重点的に見ておきたい。

1 通話、メール「以外」も万全か

最先端の機能は求めないにせよ、2メガのカメラとフェリカ内蔵は最低限のスペックといえるだろう。ワンセグ対応も珍しくない今なら、ワンセグを見やすくするための何らかの工夫も欲しいところだ。



④極度に薄い端末では、部品レイアウトの都合上、どうしても画面サイズに制約が出る

2 使い勝手に割り切りはないか

特に薄型端末では、画面の小ささ、キーの押しにくさに不満を覚えるケースが依然として多い。ある程度機能を絞った端末だからこそ、メールの読みやすさ、打ちやすさには妥協したくない。



⑤キーの押し込み幅が浅いのが薄型端末の難点。キー形状の工夫である程度緩和できる

液晶、カメラ……どこで差が出る？ 「2年後も使える1台」を選ぶ方法

「バリューコース」「フルサポートコース」に象徴されるように、これから買う端末は2年の継続使用が半ば前提となる。長い間付き合うことを最初から意識して、端末を選ぶべきだ。

ドコモの905iを中心としたハイスペックな端末では、ワイドVGAの高精細な液晶、ワンセグの予約録画対応が当たり前になった。主な仕様は似ており、どの機種も魅力的に映る。

まずチェックするべきは、こうした一見横並びの状況のなかで、突出した特徴を備えているかどうか。例えば、ブルートゥース内蔵のケータイは意外に少ない。しかし、対応機種は増えていくし、無線で使う音声通話や音楽機能は想像以上に便利。こうした、将来の機能の先取りともいえる部分があれば、1年後、2年後に最新の端末と比べたときに、見劣りする部分をカバーすることができる。

もう一つ重要なのが、端末の形状。「高機能でも、使いこなす気になれない」——今までのハイスペック端末に多かった悩みの種。長く使うのに、これではもったいない。テレビはよりテレビらしい、音楽はより音楽プレーヤーらしいスタイルで使える端末のほうが、使ってみようという気にもなるだろう。

ハイスペックな端末だけでなく、比較的安価な、ベーシックな端末にも、小型・軽量で魅力的な機種が多い。ただ、いまだにフェリカを内蔵せず、液晶が極端に小さい端末もある。長く使える端末を選ぶためには、まず端末全体のバランスをよく見極めることだ。

注) PMCは、「パナソニック モバイルコミュニケーションズ」、ソニー・エリクソンは「ソニー・エリクソン・モバイルコミュニケーションズ」の略。以降のページでチェックした端末は、いずれも試作機であり、製品版とは外観や仕様が異なる場合がある

Your potential. Our passion.
Microsoft

会社メール、個人メール、Webメール、ケータイメール、あらゆるメールを完全制覇。



SoftBank X01T
(原寸大)

Windows Mobileで
新たな可能性を、その手に。

ウィンドウズモバイル 検索

今、Windows Mobile端末を購入されると抽選で500名様に素敵なプレゼントが当たる、Smart Chance
キャンペーン実施中！ キャンペーンは2008年1月7日まで。詳細は、「ウィンドウズモバイル」で検索。

Microsoft, "Your potential. Our passion.", Windowsロゴ, Windows Mobile, Excel, PowerPoint, Outlook, Internet Explorerは、米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標または商標です。*その他記載されている、会社名、製品名、ロゴ等は、各社の登録商標または商標です。*製品の仕様は、予告なく変更することがあります。あらかじめご了承ください。*画面は、イメージです。実際の画面とは異なります。*デバイスや回線契約により、利用可能なプログラムや機能が異なります。詳細は、通信会社にお問い合わせください。*マイクロソフト製品に関するお問い合わせは、マイクロソフトカスタマーインフォメーションセンター 0120-41-6755(9:30~12:00, 13:00~19:00土日祝日、弊社指定休業日を除く) マイクロソフト株式会社

ベーシック端末

NEC N905iμ 予想実質価格2万6000円

厚さ	画面	カメラ
12.9mm	3型 VGA	200万画素
通信	機能	
GSM +3G	HSDPA	

●サイズ・重さ／幅50×高さ108mm・106g●バッテリー／連続待受約630時間、連続通話約220分●予想販売価格／4万6000円

カメラが200万画素とやや弱く、ワンセグにも非対応。だが、それ以外のスペックはほかの905iシリーズと比べても遜色なく、それでいて12.9mmの薄さにまとうている。「ワンセグはいらないが、ほかの機能は欲しい」という人は多いだろうが、まさにうってつけの1台といえる。シート状のキーは操作感が心配だが、それなりに工夫されており、致命的な弱点にはなっていない。

⑤高精細なVGA液晶。GPS機能も実用的

最新の端末は欲しいがワンセグは見ない、という人に最適な機種。基本部分の性能は高い

機能優先派には、やや弱い端末。905iでは異質な存在

ハイスペック端末

富士通 F905i 予想実質価格3万2400円

厚さ	画面	カメラ
18.5mm	3型 VGA	510万画素
通信	機能	
GSM +3G	HSDPA	ワンセグ

●サイズ・重さ／幅49×高さ106mm・137g●バッテリー／連続待受約580時間、連続通話約200分●予想販売価格／5万円

横方向にも開く本体が最大の特徴。画面の角度を自由に変えられるのでワンセグが見やすく、チャンネル操作も簡単。510万画素のカメラとブルー투스内蔵、スペックにはほとんどスキがない。タイムシフト再生には対応せず、ワンセグの録画機能などに関しては他社端末に譲る部分もあるが、全体的に完成度は高い。横開きに魅力を感じなくとも、選んで後悔のない端末。

⑤総画面表示なら、メールを書きながらワンセグを見られる⑥スピーカー穴は背面のカメラの周囲に配置。置いて視聴する際にも穴がふさがれないよう設計されている

工夫された本体形状で、ワンセグを見るなら特に有力な選択肢。カメラ機能を重視する人にも向く

録画、ながら視聴など細かな機能では一歩譲る面も

横開き時には、液晶部分を2点で支える構造。画面角度は自由にえられる。ノートパソコンなどに似た感覚だ

ハイスペック端末

ソニー・エリクソン SO905i 予想実質価格3万2400円

厚さ	画面	カメラ
19.7mm	3型 VGA	320万画素
通信	機能	
GSM +3G	HSDPA	ワンセグ

●サイズ・重さ／幅49×高さ110mm・134g●バッテリー／連続待受約520時間、連続通話約230分●予想販売価格／5万円

タッチパネルを多用した操作系。使い勝手は必ずしも良くない

ワンセグ、音楽再生機能が売り。本体背面にスタンドが付いており、角度をつけて立てられる(下写真)。チャンネル操作などは液晶脇のタッチパネルでできるが、手に持ったことや誤操作しやすい。ながら操作に弱いのも難。

⑤表面の下半分には音楽機能専用のタッチパネルが内蔵されている

⑥液晶が大きいので、地図を見ながらのワンセグ視聴も十分実用的⑦液晶部分を倒すと、メニューなども自動で横表示になる⑧他機種同様、予約録画にも対応

ワンセグ機能、音楽機能ともそこそこ使ってみたい、という程度の人には合う

操作系には慣れが必要な部分が多く、標準的な操作感を求める人には向かない

ハイスペック端末

NEC N905i 予想実質価格3万2400円

厚さ	画面	カメラ
19.6mm	3型 VGA	520万画素
通信	機能	
GSM +3G	HSDPA	ワンセグ

●サイズ・重さ／幅49×高さ109mm・133g●バッテリー／連続待受約600時間、連続通話約220分●予想販売価格／5万円

カメラが売りの好バランス機。あとは「かたち」の工夫があれば

顔認識機能付きカメラが売りで、520万画素と高性能。長時間の音楽再生にも対応しており、完成度は高い。ただ、標準的な2軸ヒンジの液晶のため、ワンセグの見やすさでは一歩譲る。録画機能はひと通りそろっている。

⑥基本機能の部分に独自の工夫が多い。内蔵のフルブラウザは滑らかに動作し、パソコンに近い感覚でウェブが見られる

カメラに魅力を感じる人、機能全体のバランスを優先する人なら候補の一つ

ワンセグ重視なら、やや決め手を欠く印象もあるため、ほかの端末も考慮すべき

ール、iモードなどほかの機能を使いながらのワンセグの「ながら視聴」にも強い。

液晶は32型で、905iシリーズのなかでも大きいほう。ワンセグ機能だけが特徴ではなく、ほかの機種にはない指紋センサーを内蔵しており、ワンタッチでフェリカ機能をロックできるのは便利。魅力的な点が多い機種だ。ただ、音楽機能やカメラ機能には目立った長所が少ない。

これ以外にも、顔認識機能付きの200万画素カメラを備えた「N905iμ」(NEC)、音楽再生機能も充実している「SO905i」(ソニー・エリクソン)といった選択肢もある。ただ、端末の「かたち」まで含めたトータルバランスでは、いずれもP905iとF905iに一歩及ばない。特徴があり、しかもきちんと使いこなせる高機能端末が欲しいなら、まずはPとFの2機種を検討するのがよさそう。

こうした充実した機能の一方で、905iシリーズはどれも本体が大きい。高さが110mmを超える端末や、厚さが20mm以上の端末もある。特にワンセグ機能が必要な人にとっては、これほどのサイズの端末をポケットに入れて歩くのは、少々ためらわれるだろう。

その点、「N905iμ」(NEC)の厚さ12.9mmは、非常に魅力的な数字。ワンセグ非対応、カメラは200万画素と物足りないが、それ以外は操作感も含めほとんど遜色ない。主要な2つの機能を割り切る必要はあるものの、選択肢には入れておきたい。

ハイスペック端末

富士通 F905i 予想実質価格3万2400円

厚さ	画面	カメラ
21mm	3.2型 VGA	320万画素
通信	機能	
GSM +3G	HSDPA	ワンセグ

●サイズ・重さ／幅50×高さ108mm・138g●バッテリー／連続待受約505時間、連続通話約190分●予想販売価格／5万円

大型液晶で「ながら視聴」に強い。指紋認証にも対応

905iシリーズでも特に大きい、3.2型の液晶。標準設定では液晶を横に倒すとワンセグが起動し、画面の角度も調整しやすい。「ながら視聴」への配慮も行き届いており、ワンセグを見ながらGPSでの現在位置確認も問題なくできた。指紋認証への対応も、今回のシリーズで唯一だ。ただし、本体は大きめで、カメラや音楽再生機能のスペックは平均レベル。

先代とは違って録画機能も万全で、ワンセグ第一なら最有力。セキュリティ機能を求める人にも向く

機能は豊富だが、厚さ20mmを超えるサイズは気になる

⑥液晶が大きいので、地図を見ながらのワンセグ視聴も十分実用的⑦液晶部分を倒すと、メニューなども自動で横表示になる⑧他機種同様、予約録画にも対応

ワンセグ、動画、フルブラウザなど、横画面でケータイを使うシーンを意識した新しい工夫が目立つのが、「P905i」(PMC)だ。端末の液晶部分が、縦にも横にも開く構造。横に開くとすぐにワンセグが見られるうえ、数字キーでチャンネル操作などが簡単にできるため、片手でも扱える。横画面利用に配慮した端末のかたちという意味では、特に優れている。

本体は905iのなかでもコンパクトな部類。それでいて50万画素のカメラ、ブルー투스と特徴的な機能を内蔵している。ワンセグの番組を録画しながら追いかけて再生する「タイムシフト再生」には対応していないなど、不満点がないわけではないが、全体にうまくまとまった1台だ。

P905i同様、横画面での利用に適した端末形状なのが「F905i」(富士通)だ。液晶の部分が左右に倒れる仕組みで、手に持っても机に置いて、自然な角度でワンセグが見られる。タイムシフト再生に対応するほか、メ

ハイスペック端末

PMC P905i 予想実質価格3万2400円

厚さ	画面	カメラ
18.5mm	3型 VGA	510万画素
通信	機能	
GSM +3G	HSDPA	ワンセグ

●サイズ・重さ／幅49×高さ106mm・137g●バッテリー／連続待受約580時間、連続通話約200分●予想販売価格／5万円

「横開き」でワンセグが見やすい。スペックもほぼ万全

横方向にも開く本体が最大の特徴。画面の角度を自由に変えられるのでワンセグが見やすく、チャンネル操作も簡単。510万画素のカメラとブルー투스内蔵、スペックにはほとんどスキがない。タイムシフト再生には対応せず、ワンセグの録画機能などに関しては他社端末に譲る部分もあるが、全体的に完成度は高い。横開きに魅力を感じなくとも、選んで後悔のない端末。

工夫された本体形状で、ワンセグを見るなら特に有力な選択肢。カメラ機能を重視する人にも向く

録画、ながら視聴など細かな機能では一歩譲る面も

横開き時には、液晶部分を2点で支える構造。画面角度は自由にえられる。ノートパソコンなどに似た感覚だ

905iシリーズの特徴は、何といっても高機能であること。大型・高精細なワイドVGA液晶、ダウンロード速度が最大で従来の約10倍速いHSDPA対応、世界の大半の地域で使えるGSMローミング対応――いずれも905iシリーズでは標準の機能だ。どれを買っても大きな不満はなさそうだが、メーカーならではの独自の工夫、高機能を使いこなすための配慮といった点では、機種ごとに意外なほど差が出ている。

ワンセグ、動画、フルブラウザなど、横画面でケータイを使うシーンを意識した新しい工夫が目立つのが、「P905i」(PMC)だ。端末の液晶部分が、縦にも横にも開く構造。横に開くとすぐにワンセグが見られるうえ、数字キーでチャンネル操作などが簡単にできるため、片手でも扱える。横画面利用に配慮した端末のかたちという意味では、特に優れている。

本体は905iのなかでもコンパクトな部類。それでいて50万画素のカメラ、ブルー투스と特徴的な機能を内蔵している。ワンセグの番組を録画しながら追いかけて再生する「タイムシフト再生」には対応していないなど、不満点がないわけではないが、全体にうまくまとまった1台だ。

P905i同様、横画面での利用に適した端末形状なのが「F905i」(富士通)だ。液晶の部分が左右に倒れる仕組みで、手に持っても机に置いて、自然な角度でワンセグが見られる。タイムシフト再生に対応するほか、メ

モ、auはそれぞれバリューコース、シンプルコースでの割引を加味しない価格を想定し、ソフトバンクは新スーパーボーナスに加入せずに購入した場合の価格を記載している。ただし、ドコモのすべての端末価格は、期間限定のキャンペーン割引(8400円)を差し引いてある

料金の値下がり普及を後押し SIMロックフリーで「変わり種」も登場

3.5Gの高速通信が普及し、キャリアもデータ通信に配慮した料金プランを整備。スマートフォンが普及する土壌は整いつつある。また、5型の超大型液晶、フルキーボード付きといった個性的な商品を、キャリアではなくメーカーが直接販売。ドコモ、ソフトバンクいずれのSIMカードでも使える。キャリアブランドの端末がカバーできない領域で、一定の市場を築きそうな勢いだ。



④⑤「Windows Mobile 6」を採用する端末が増えている。形状も縦型、横型などさまざま

⑥万人受けする端末はキャリアがSIMロック付きで販売、ややニッチな端末はメーカーがSIMロックなしで売るのが今後の流れだろう

この冬は、スマートフォンの新商品が多数登場。データ通信を気軽に使える料金プランが各キャリアで導入されたことで、「一度は使ってみよう」と考えているユーザーも多いだろう。スマートフォンの魅力は、大画面でのウェブ・メールの閲覧やオフィス文書の編集機能。ただ、今回取り上げた端末はどれも、性能的に「パソコン並みに軽快」というレベルにはまだ遠い。機能面での割り切りも多く、万人受けする商品ジャンルではないだろう。とはいえ、こうした点を理解したうえで買うなら、十分魅力的といえる商品も登場している。

各社から続々登場のスマートフォン 「初心者歓迎」とは、まだ言いにくい

最も話題を集めるのが、「HTC Advantage X7501」(HTC)。机に置いて両手で文字入力ができるキータイだ。素早く入力するには慣れが必要だが、ノートパソコンはサイズの面で我慢ならない、というユーザーにとっては、格好の1台だ。HTC社は現在、次々に新商品を投入しており、ドコモから発売予定の「HT1100」もその一つ。画面をなぞる独特のインターフェイスで、初めてスマートフォンを使う人にも、比較的敷居の低い端末といえる。

HTC Advantage X7501 (HTC)

実勢価格11万9800円

着脱式のキーボードが付属 無線機能も充実する高価格機

5型液晶と着脱式のキーボードを備えた、大型の端末。SIMロックフリーで販売されている。キーボードは強力な磁石で本体にセットする仕組みで、ノートパソコンのようなスタイルで使える。キータッチは独特で、ブラインドタッチには慣れが必要。HSDPA、無線LAN対応でBluetoothも内蔵する。電話にはヘッドセットを使う。



①キーボードに磁石を内蔵。本体にはしっかりと固定できる②キータッチは堅め③縦表示でも使える。本体の傾きに合わせ、画面をスクロールさせる機能もある

HT1100 (NTTドコモ、HTC)

予想実質価格3万6000円

違和感のない形状と文字入力 インターフェイスに工夫が多い

形状こそ一般的なスライド型端末だが、インターフェイスは独特。タッチパネルを指でなぞると、各種機能のランチャーが起動する仕組みで、慣れるとかなり使いやすい。テンキー付きで、文字入力などは一般的なケータイに近い操作感。HSDPA対応、Bluetooth内蔵だが、無線LAN機能は内蔵しない。



④画面を左右になぞるとランチャーが回転。よく使う機能や電話帳データをすぐ呼び出せる

⑤ドコモからは「F1100」(富士通)も発売予定。こちらはタッチパネルではない。無線LAN、指紋認証対応だが、どちらかといえば法人ニーズを意識した商品



EM・ONE α (イーモバイル、シャープ)

実質価格3万9800円

新OSだが機能は大差なし 格安IP電話ソフトを内蔵

機能面での変化は少ないが、OSがWindows Mobile 6になり、新たにIP電話ソフトがプリインストールされた。1分間の通話料が約2.4円からと安い、電話機としての操作性にはまだ不満が残る。



①IP電話ソフトはヘッドセットをつないで使う



②「HTC P3600」(HTC)はテンキーを備えず、文字入力は画面操作で行う。メール確認用途などに限られるだろう。SIMロックフリーで販売



SH905i

シャープ 予想実質価格3万240円

ワンセグ付きの905iでは最軽量 ほかに決定打は見いだせない

905iのなかでは比較的小型だが、決め手となる特徴はその1点で、ごく平均的な端末。音楽の連続再生時間こそ長い、ワイド液晶や強力な日本語変換といった、同社端末の売りの部分は、今や当たり前になってしまった。



●サイズ・重さ/幅48×高さ112mm・125g●バッテリー/連続待受約540時間、連続通話約200分●予想販売価格/5万円

⑤タッチパッドに似た操作系を備えるが、これ目当てで買う、という種類の機能ではない

厚さ	画面	カメラ
16.9mm	3型VGA	320万画素
海外ローミング	HSDPA	ワンセグ

とりえずひと通りの機能は欲しいが、小型の端末が良い、という人向け

ワンセグをある程度見る人なら、形状、録画機能ともに優れた端末がほかにある

ハイスバック端末

D905i

三菱電機 予想実質価格3万240円

CMスキップも可能な録画機能 端末形状には工夫が欲しい

ワンセグの録画・再生機能が充実。CMスキップや、音声分析してのハイライト再生ができる珍しい端末だ。端末の形状は同社の従来機と同様で、やや新味に乏しい。机に置いた際の画面角度に、もう少し配慮が欲しい。



●サイズ・重さ/幅49×高さ110mm・132g●バッテリー/連続待受約530時間、連続通話約200分●予想販売価格/5万円

⑤メールを書きながらのワンセグ視聴は縦表示で可能。モーションセンサーを内蔵しており、端末を倒すと自動で横表示に

厚さ	画面	カメラ
18.7mm	3.1型VGA	320万画素
海外ローミング	HSDPA	ワンセグ

ワンセグを録画メインで楽しみたい人には、非常に便利な端末といえる

録画機能以外は、やや没個性。ほかの機能も重視するなら候補には入りづらい

ハイスバック端末

強力な薄型端末2機種は08年の発売予定

ドコモは08年に発売予定の16端末も発表済み。発売は当面先だが、待つ価値のある端末もいくつかある。筆頭格ともいえる「P705iμ」(PMC)と「N705iμ」(NEC)は、ともに厚さわずか9.8mm。3型の液晶とフェリカ内蔵で、多くの人にとって文句のないスペックだろう。変わり種としては、510

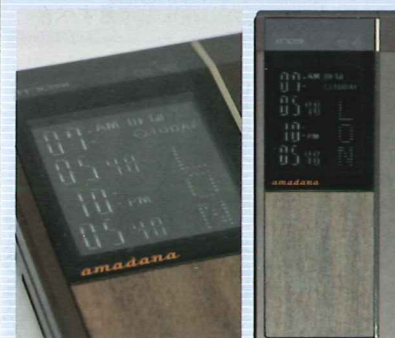
万画素・光学3倍ズームの「サイバーショットケータイ」(S0905iCS、ソニー・エリクソン)や、秒間15フレームのワンセグを30フレームに補完する「ピエラケータイ」(P905iTV、PMC)などもある。ただ、これら以外の機種は見るべき点の少ないものも多く、あえて待つほどではないだろう。



①②カメラ機能特化型の「S0905iCS」(ソニー・エリクソン)。撮った写真に自動でGPSの位置情報を付加できる。本体サイズはかなり大きめだが、ワンセグには対応しない



③④「P705iμ」(PMC)は、サブ液晶に加え同社特有のワンタッチオープン機構もある④「N705iμ」(NEC)。この2端末は厚さ9.8mmで、3G対応の折りたたみ型では世界最薄という。ともにHSDPA対応、3型液晶とかなりのスペックで登場する



⑤大型のサブ液晶が特徴的な「アマダナケータイ」(N705i、NEC)。メインの液晶も3型と大きめ。アンテナ内蔵タイプのワンセグケータイで、GSMローミングにも対応している



⑥⑦スライド型の「ピエラケータイ」(P905iTV、PMC)。液晶は3.5型と非常に大きい⑧「アクオスケータイ」(SH905iTV、シャープ)も登場するが、SH905iと機能的な違いは少ない。905iTVの2機種と705iシリーズの全機種はGPS非対応なので注意が必要

W53K

京セラ 予想実質価格1万5500円

**平凡なスペックのワンセグ機
フェリカ非対応なのがマイナス**

2軸ヒンジ、ワンセグ対応のごく平均的な端末。工夫されたキー、日本語入力など基本機能の完成度は高い。ただ、機能面では没個性で、あえて選ぶ理由に乏しい。フェリカを内蔵していない点も気になる。

●サイズ・重さ／幅49×高さ106mm・130g●バッテリー／連続待受約300時間、連続通話約250分●予想販売価格／3万6500円

⑥キーは大型。キートップには微妙な段差がついており、かなり押しやすい

厚さ	画面	カメラ
15.4mm	2.7型 QVGA	197万画素
非対応	非対応	ワンセグ

基本機能を気にする人で、とりあえずワンセグゲータイが欲しい人向け

フェリカ機能を使う可能性があるので、まず選択肢から外しておく必要がある

W55T

東芝 予想実質価格1万5500円

**auでは珍しい、薄さ優先の端末
直感的に操作しづらいキーが難**

厚さ9.9mm、クレジットカード大の本体サイズが特徴。薄型端末の少ないauでは際立った存在だ。ただし、フェリカを内蔵せず、液晶も2.4型と小さめ。シート状のキーも、表面がフラットでやや操作しづらい。

●サイズ・重さ／幅54×高さ99mm・104g●バッテリー／連続待受約270時間、連続通話約220分●予想販売価格／3万6500円

⑥電池を外すと薄さがよくわかる。本体は頑丈で強度に不安はない

厚さ	画面	カメラ
9.9mm	2.4型 QVGA	196万画素
非対応	非対応	ワンセグ

とにかく薄いケータイがほしいauユーザーには、唯一無二の選択肢といえる

操作感、機能面の両方で割り切りが必要。実用性を求めるなら慎重に検討すべき

ハイスぺック端末は“年越し”か？ 見所は多くない

auのハイスぺック端末3機種は、発売が遅れる見込み。auは現在、メーカーごとにばらばらだったソフトウェアを共通化し、端末コストを下げる取り組みを進めており、この3機種はその成果として初めて商品化される端末になる。ただ、過渡的な状況で開発されたせいか、他キャリアの同等ス

⑥東芝の「W56T」のディスプレイは、2.8型の有機EL。解像度はQVGAだ。画面部分が360度回転する珍しい形状。キーはシート状のものを採用している

⑥④スライド式の「W54SA」（三洋電機）は、VGA解像度の3型液晶を内蔵。数字キー部分にセンサーが組み込まれており、パソコンのタッチパッドのように操作できる

⑥⑤「W54S」（ソニー・エリクソン）は外観、仕様ともW56Tにそっくりだが、画面部分は反転せず、中身の画面構成なども異なる

⑥⑥本体側面にわずかに角度を付けてあり、机に置いて見やすい



auの端末は現在、ソフトやハードの転換期に差ししかかっており、08年には高機能・大型の端末に軸足を移すと考えられる。その意味でも、小型で完成度の高いこの冬の2機種は、買って損のない端末といえる。

「W55T」（東芝）、「W53K」（京セラ）は、いずれもフェリカを内蔵していないのが難点。W55Tは全キャリアを通して突出した薄型端末だが、キーにほとんど突起がないため、メールを打つにも慣れが必要だろう。

Woooケータイ W53H

日立製作所 予想実質価格1万7800円

有機EL画面の薄型端末。「気軽にワンセグ」には最適

有機ELディスプレイの折りたたみ型端末。フェリカ・GPS対応と機能的には平均水準だが、画面は2.8型で、このクラスには大きめ。ベーシックな端末ながらもワンセグ機能が売りで、側面のボタンからチャンネル操作ができるなどの配慮もある。この機能で厚さ14.2mmは薄い部類。ただ、基本部分の使い勝手では、キーの大きなINFOBAR 2にやや分がある印象だ。

●サイズ・重さ／幅51×高さ107mm・131g●バッテリー／連続待受約360時間、連続通話約250分●予想販売価格／3万8800円

⑥キートップも曲面だが大きいので押しやすい(左) (右) ワンセグ機能は不満のない水準

Woooケータイ W53H

日立製作所 予想実質価格1万7800円

有機EL画面の薄型端末。「気軽にワンセグ」には最適

有機ELディスプレイの折りたたみ型端末。フェリカ・GPS対応と機能的には平均水準だが、画面は2.8型で、このクラスには大きめ。ベーシックな端末ながらもワンセグ機能が売りで、側面のボタンからチャンネル操作ができるなどの配慮もある。この機能で厚さ14.2mmは薄い部類。ただ、基本部分の使い勝手では、キーの大きなINFOBAR 2にやや分がある印象だ。

●サイズ・重さ／幅51×高さ107mm・131g●バッテリー／連続待受約360時間、連続通話約250分●予想販売価格／3万8800円

それなりにワンセグは見たいが、ハイスぺックな端末を買うほどではない、という人にちょうどよい

ワンセグが二の次なら、INFOBAR 2と比較検討すべき

端末側面のボタンから音量調節などができる。アンテナは本体に内蔵。受信感度は問題のないレベル

INFOBAR 2

三洋電機 予想実質価格1万9800円

ある程度のスペックは網羅した、まとまりの良い端末

現状の平均的な機能はひと通り網羅。大きめのキーとコンパクトな本体で、使い勝手の面でも魅力的な1台だ。ディスプレイは有機ELで、ワンセグにも対応。アンテナは本体に内蔵されており、イヤホンアンテナを使わなくてもある程度の感度でワンセグが受信できる。ただ、ディスプレイ部が曲面になっているせいか、屋外では外光の映り込みがやや気になった。

●サイズ・重さ／幅47×高さ138mm・104g●バッテリー／連続待受約350時間、連続通話約290分●予想販売価格／4万8000円

⑥キートップも曲面だが大きいので押しやすい(左) (右) ワンセグ機能は不満のない水準

フェリカ、ワンセグなどの機能は押さえつつも、キーの押しやすさなど基本部分を重視したい人向け

一定頻度でワンセグを見るなら、ほかの端末も要検討

比較的小型ながらワンセグ機能内蔵。横表示もできる。ただし、特に屋外では画面への映り込みが気になった

Woooケータイ W53H

日立製作所 予想実質価格1万7800円

有機EL画面の薄型端末。「気軽にワンセグ」には最適

有機ELディスプレイの折りたたみ型端末。フェリカ・GPS対応と機能的には平均水準だが、画面は2.8型で、このクラスには大きめ。ベーシックな端末ながらもワンセグ機能が売りで、側面のボタンからチャンネル操作ができるなどの配慮もある。この機能で厚さ14.2mmは薄い部類。ただ、基本部分の使い勝手では、キーの大きなINFOBAR 2にやや分がある印象だ。

●サイズ・重さ／幅51×高さ107mm・131g●バッテリー／連続待受約360時間、連続通話約250分●予想販売価格／3万8800円

⑥キートップも曲面だが大きいので押しやすい(左) (右) ワンセグ機能は不満のない水準

それなりにワンセグは見たいが、ハイスぺックな端末を買うほどではない、という人にちょうどよい

ワンセグが二の次なら、INFOBAR 2と比較検討すべき

端末側面のボタンから音量調節などができる。アンテナは本体に内蔵。受信感度は問題のないレベル

この冬のau端末は、06年末に比べ、ずいぶん機種数が少ない。10月の発表時に目玉とされていたハイスぺック機3端末は、発売が08年にずれ込む見通し。年末商戦のメインとなるのは、比較的手ごろな価格のWIN端末4機種だ。ひたすらハイスぺック路線に走るドコモの端末とは異なり、機能面での進化はあまり見られず、地味なラインアップにも映る。

一方でこの状況は、ベーシックな端末を割安で購入するチャンスともいえる。象徴的なのが、「INFOBAR 2」（三洋電機）だ。

本体は10gと軽量。厚さは15.5mmだが、全体が丸みを帯びており、持つてみると数値以上にコンパクトに感じられる。フェリカ、ワンセグ、GPS機能内蔵で、このクラスの端末を求めるユーザーなら十分すぎるスペックだ。手になじむ形状と大型のキーで、使い勝手も洗練されている。

ディスプレイに有機ELを採用するのも特徴。解像度は従来通りのQVGAだが、特にワンセグ視聴では、有機ELの売りである高いコントラスト比の表示が生きる。ただ、ストレート型の本体のため、横表示にするときやや持ちにくい。画面サイズも2.6型と大きくはないため、ワンセグ機能は付加的なものと考えたほうがいいだろう。よりワンセグ機能を重視するなら、「Woooケータイ W53H」（日立製作所）を検討すべき。より大きな2.8型の有機ELディスプレイで、横表示にも配慮した2軸ヒンジの端末だ。フ

PHOTOS 920SC

サムスン電子 予想実質価格2万8320円

5メガ・顔認識付きカメラが武器
それ以外の美点はあまりない

500万画素カメラのスライド型端末。基本部分も同社の従来端末より改良され、全体の使い勝手が向上したが、ワンセグには対応しておらず、カメラ以外のスペックはやや平凡。「一点突破」の印象が強い端末だ。



●サイズ・重さ／幅52×高さ101.5mm・129g
●バッテリー／連続待受約340時間、連続通話約200分●予想販売価格／8万1120円

④コンパクトデジカメなどと同様のキyonoフラッシュを内蔵する

厚さ	画面	カメラ
18.9mm	2.4型 QVGA	500万画素
海外ローミング	GSM +3G	HSDPA

○ ケータイに主にカメラとしての性能、使い勝手を求める人には適している

✕ カメラ以外の機能も多少なりとも気にするのなら、他社の端末と比較検討すべき

キャラクター、シニア向け…「見せ方」変えた端末も多数

ソフトバンクは従来から、中身が同じで外見だけ異なる端末を多く発売しているが、その逆も登場する。液晶は小さいが外見は920SHと同じ「822SH」（シャープ）がそれだ。ほかにも、キャラクターの名前を付けてデザインを微妙に変えた端末や、ソフトを改良して型番を変えた端末など、細かなバリエーションが多い。実は最新の端末でないケースもあり、注意が必要だ。



④⑤シャープの「913SH」をベースにしたスライド式端末「913SH G TYPE-CHAR」。組み立て式の大型充電台が標準で付属する

④「パトーンケータイ」をベースにキーの刻印やソフトウェアなどを変え、シニア層を意識した端末「GENT 812SH sII」（シャープ）

⑤「パトーンケータイ」をベースにキーの刻印やソフトウェアなどを変え、シニア層を意識した端末「GENT 812SH sII」（シャープ）

ソフトバンクでは以前から、キャリアのサービス自体をシャープ製端末が牽引する図式になっていた。今回も、新たな音楽サービスに完全対応したのはシャープ製の2端末だけ。GPSに対応していない点は気になるが、この冬も、まずはシャープの2機種から検討するのがよさそうだ。

文／有我武雄、森岡大地 photo／高山 透、竹井俊晴、尹 総吉

920T

東芝 予想実質価格3万3120円

1GBメモリー内蔵で録画向き
端末のかたちは、ごく平凡

3型・VGA液晶のスライド型端末。ワンセグの予約録画が可能で、データは1GBの内蔵メモリーに保存できる。ただ、形状の工夫という点ではアクオスケータイに及ばない。ソフトバンク端末では珍しく、GPS機能に対応する。



●サイズ・重さ／幅51×高さ113mm・141g●バッテリー／連続待受約380時間、連続通話約170分●予想販売価格／8万5920円

厚さ	画面	カメラ
18.6mm	3型 VGA	324万画素
海外ローミング	非対応	HSDPA

○ 録画中心でワンセグを見たい人向け。内部メモリーには5時間以上録れる

✕ フルブラウザなど、ワンセグ以外にも横表示の機能を多く使うなら920SHが良い

MIRROR 821P

PMC 予想実質価格1万1520円

外見からしてシンプルで端末機能面での魅力はほとんどない

低価格な売れ筋モデルの後継機。機能面では、GSMローミング、ブルートゥースに対応している以外は見るべき部分がない。目立って薄型なわけでもない。同シリーズの「820P」は、外装が違うだけで中身は同一。



●サイズ・重さ／幅50×高さ104mm・113g●バッテリー／連続待受約400時間、連続通話約200分●予想販売価格／6万4320円

厚さ	画面	カメラ
15.9mm	2.8型 QVGA	200万画素
海外ローミング	GSM +3G	

○ 通話とメールさえできれば問題ないユーザーには、まさに必要十分な端末

✕ HSDPAにも対応していないため、多少でもウェブを使うなら慎重に検討すべき



M I U M 820SH。一般的な折りたたみ型の端末なので、ワンセグを横画面で見るとはやや苦しいが、厚さ13・4mmながら予約録画までできる。今や基本機能ともいえるフェリカ、HSDPAにも対応しており、機能面ではまず不足がない。

2.6型のQVGA液晶、200万画素のカメラは、やや平凡な印象もあるが、この部分を割り切れば不満を覚える面は少ないはずだ。ただ、海外ローミング非対応である点は覚えておきたい。同じベーシック端末では、PMCの「MIRROR 821P」もあるが、こちらはごくシンプルな機能の端末。通話、メール、海外ローミングさえできればいいという人なら、選択肢に入らないでもない。

ソフトバンクでは以前から、キャリアのサービス自体をシャープ製端末が牽引する図式になっていた。今回も、新たな音楽サービスに完全対応したのはシャープ製の2端末だけ。GPSに対応していない点は気になるが、この冬も、まずはシャープの2機種から検討するのがよさそうだ。

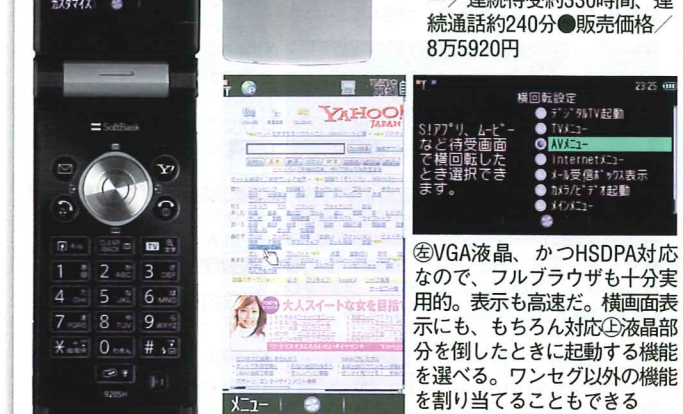
© 前通・サンライズ

920SH

シャープ 実質価格3万3120円

ワンセグ機能も細かく進化、ソフトバンク最強の端末

ソフトバンクで4機種目の「アクオスケータイ」。液晶が3.2型とさらに大きくなり、本体は前モデルと比べ約5mm薄くなった。画面の角度を調整しやすい本体形状に加え、タイムシフト再生もできるなど、ワンセグ関連の機能は優秀。HSDPA、GSMローミングに対応するうえ、ブルートゥースも使えるが、GPS機能は内蔵していない。液晶の小さなバージョン「822SH」もある。



●サイズ・重さ／幅50×高さ110.6mm・123g●バッテリー／連続待受約330時間、連続通話約240分●販売価格／8万5920円

④VGA液晶、かつHSDPA対応なので、フルブラウザも十分実用的。表示も高速だ。横画面表示にも、もちろん対応。液晶部分を倒したときに起動する機能を選ぶ。ワンセグ以外の機能を割り当てることもできる

○ ハイスベック志向の人だけでなく、初心者が買っても使いこなせる高機能端末。万人に向く1台

✕ 最先端の仕様が必要ないなら、下位の820SHも候補



⑤横画面専用のメニューも用意。音楽機能やフルブラウザを使いやすくするための配慮が行き届いている

THE PREMIUM 820SH

シャープ 予想実質価格2万5920円

必要十分といえる機能をうまくまとめた、薄型端末

外装にステンレスを使った端末。上位機種920SHに比べると、液晶、カメラ、国際ローミング対応で見劣りするが、それ以外は小型ながらも十分なスペックだ。薄型の割にキータッチはしっかりしており、安心して使える端末。ワンセグは予約録画まで可能だが、ヒンジの部分に工夫がないため、横画面での視聴は難しい。本体の厚さが異なる「821SH」もあるが、機能は同一。

○ ハイスベック機を買うほどではないが、ひと通りの機能は押さえておきたいという人にはうってつけ

✕ ワンセグを本格的に見るには形状からして向かない



④サブ液晶は本体の裏側にある。ワンセグ用のアンテナも目立たない位置に収納されており、伸ばして使う

⑤フェリカ内蔵はソフトバンクでは意外に貴重⑥ワンセグは縦での視聴が主になるだろう

ソフトバンクは相変わらず機種数こそ豊富だが、外装だけを変えたバリエーション端末などを除くと、冬商戦向けの新端末は実質的に5機種。型番は、920番台がハイスベックな端末、820番台が比較的ベーシックな端末という位置づけになっている。

ラインアップの主軸は、今回も「アクオスケータイ」だ。「920SH」（シャープ）は今回新たにGSMローミングやWMA形式の音楽ファイルの再生に対応。液晶も大型化し、さらに強力なスペックになった。

だが、最も歓迎すべきは本体サイズの小型化だろう。前モデルの「912SH」に比べ約5mmも薄型化。スピーカーはモノラルになったが、音が、ようやく厚さが20mmを切った。ワンセグを見るには適しているが、どうしても厚みが気になる形状だっただけに、この進化は大きい。

中身のソフトウェアも改良されており、横画面での使い勝手も大幅に向上した。ワンセグ、フルブラウザなど、横表示のほうで便利なコンテンツは増えてきているので、独自の画面回転機構を生かせる場面は多い。

ハイスベック端末の選択肢は、ほかにも「920T」（東芝）や「PHOTOS 920SC」（サムスン電子）がある。ただ、前者がGPS、後者が500万画素カメラという特徴を備える以外、機能・使い勝手の両面で920SHを大きく上回る要素は少ない。

ベーシックな端末のなかで、抜きん出た実力といえるのが「THE PREMIUM 820SH」。